

SATELLITE

System Analysis Total Environment for Laboratory
— Language and InTeractive Execution

Command Reference

SHELL, MATHEMATIC LIBRARY

SL-UTIL, SYSTEM, ISPP, GPM

BPS, NCS, NPE, DCM

Version 2.0, 24th Apr 2000

BPEL-TUT

目次

SHELL (シェル)	1
ALIAS	2
BREAK	3
CONST	4
CONTINUE	5
DEFINE	6
DO	7
EVAL	8
EXIT	9
EXTERNAL	10
FOR	11
FUNC	12
GARCO	13
GOODBYE	14
HISTORY	15
IF	16
INDEX	17
INLINE	18
ISDEF	19
LENGTH	20
MODULE	21
PRINT	22
PRINTF	23
PROC	24
READ	25
RETURN	26
SCALAR	27
SERIES	28
SNAPSHOT	29
STRING	30
STRLEN	31
SYMBOLS	32
TYPEOF	33
UNDEF	34
UNIX	35

WELCOME	36
WHILE	37
WRITE_TYPE	38
Mathematic Library (数学ライブラリ)	39
ABS	40
ACOS	41
ASIN	42
ATAN	43
ATAN2	44
COS	45
EXP	46
EXP2	47
INT	48
LOG	49
LOG2	50
LOG10	51
MOD	52
POW	53
SGN	54
SIN	55
SQRT	56
TAN	57
SL_UTIL (ユーティリティ)	58
EXIST	59
DUMP	60
EXTRACT	61
FILEINDEX	62
HGET	63
INDEXSIZE	64
PUTS	65
REVTIME	66
Scalar	67
Series	68
Snapshot	69
SPRINTF	70
Sprintf	71
String	72
TEXT2STRING	73
UNITMAT	74
TOLOWER	75
TOUPPER	76

SYSTEM (基本コマンド)	77
BM	78
CUT	79
FILL	80
FIND	81
GET	82
HEADER	83
HELP	84
MABI	85
MAX	87
MAXPOS	88
MERGE	89
MIN	90
MINPOS	91
PUT	92
REFORM	93
REVERSE	94
ROTATE	95
SAM	96
WAIT	97
ZERO	98
 ISPP (ディジタル信号処理)	 99
AKIMA	100
ARAND	101
ARGEN	102
AVERAGE	104
BPBTW	105
BURG	106
CEP	108
DCCUT	109
DET	110
EIGEN	111
FFTC	112
FFTN	113
FIR	114
FIRMAKE	115
GAUSS2	116
HIL	117
HPBTW	118
ICEP	119
IIR	120
IIRCOEF	121

INTEG	122
INTERP	123
INV	124
LEVIN	125
LPBTW	126
MNRAND	127
MUL	128
NMEQ	129
NORM	130
NRAND	131
PHASE	132
POLE	133
POWER	134
RANK	135
SHIFT	136
SPCF	137
SPLINE	138
TRANS	139
URAND	140
WINDOW	141
GPM (グラフィックシステム)	142
AXIS	143
CHWIN	145
COLOR	146
CONT	147
DRAW	148
EGRAPH	149
FACTOR	151
FONT	152
FRAME	153
GINIT	154
GPM2PS	155
GRAPH	156
GSOLM	158
GSTAT	160
LABEL	161
LINE	162
LTYPE	163
LWIDTH	164
MAP	165
NEWPAGE	167
ORIGIN	168

PREV	169
SCALE	170
SIZE	172
TITLE	173
WCLOSE	174
WE	175
WOPEN	176
BPS (ニューラルネットシミュレータ)	177
ACTLOAD	178
BPLOAD	179
BPSAVE	180
COR	181
DISP	182
ERRFUNC	183
ERRLOAD	184
ERROR	185
FUNCTION	186
LALGO	187
LAYER	189
LEARN	190
LEND	191
PDISP	192
PINIT	193
REC	195
RVMAP	196
SETREC	197
SIGMOID	198
TEACH	199
WALGO	200
WEIGHT	201
WGTLOAD	202
WGTSET	204
WINIT	205
NCS (神経回路シミュレータ)	206
NASSIGN	207
NPP	208
NLINK	209
NMAKE	210
NTIME	211
NSTIM	212
NOUT	213

NPARA	214
NINTEG	215
NDELAY	216
NLIST	217
NSCLIST	218
NERASE	219
NGETP	220
NCAL	221
NE	222
NCHGBUFF	223
NPE (非線形パラメータ推定システム)	224
CDATA	225
CDEL	226
CDISP	227
CHISTORY	228
CINIT	229
CINTEG	230
CLIST	231
CLOAD	232
CLOGIC	233
CLSEARCH	234
CMETHOD	235
CMODEL	236
CNORM	237
CNUMBER	238
CPENALTY	239
CPOINT	240
CRESULT	241
CSCALE	242
CSTORE	243
CTERM	244
CWEIGHT	245
NPE	246
NPEINIT	247
DCM (データ変換モジュール)	248
ABF2SATELLITE	249
ATF2SATELLITE	250
BUF2AVS	251
BUFFER2AVS	252
BUF2TXT	253
BUFFER2TEXT	254

BUF2MAT	255
BUFFER2MATLAB	256
BUF2MATH	257
BUFFER2MATHEMATICA	258
GEN2BUF	259
GENESIS2BUFFER	260
MAT2SAT	261
MATLAB2SATELLITE	262
NRN2SAT	263
NEURON2SATELLITE	264
TXT2BUF	265
TEXT2BUFFER	266

コマンド索引	267
--------	-----

シェル

SHELL

機能) コマンドなどの別名を表示・定義・変更・削除する.

形式) `alias(["another_name", "command_string"])`

パラメータ) 1. another_name : 別名文字列
2. command_string : 実行コマンド

解説) 1. 別名が実行コマンドと同じ名前である時には, 最初の 1 回だけエイリアス展開する.
2. 何もパラメータを設定しない場合には, 別名定義の一覧を表示する.
3. 別名を削除したい場合には, command_string にヌル文字 ("") を設定すればよい.

使用例) 1. 別名定義の一覧表示

```
% alias()
ls      \ls -lCF
h       history()
close   exit
```

2. 別名の定義

```
% alias( "quit", "exit" )
```

3. 別名の削除

```
% alias( "quit", "" )
```

BREAK

SHELL

機能) ループを強制的に抜ける.

形式)

break

パラメータ) なし

解説) 使用例を示す.

```
% for( i=0; i<100; i++ ) {  
%     ..... 処理 1.....  
%     if ( data>1e15 ) {  
%         break; /* NEXT に処理が移る */  
%     }  
%     ..... 処理 2.....  
% }  
% .....NEXT.....
```

関連項目) CONTINUE

ソースファイル

組み込み関数

機能) 定数を定義する

形式) `const name = value`

パラメータ) 1. name : 定数名
2. value : 定数 (数値, 文字列)

解説) 定数として定義した値の変更は, `undef` で定義を取り消すか `const` で再定義し直すこと以外は許可されない.

ソースファイル

組み込み関数

機能) ループの先頭に処理を移す.

形式)

continue

パラメータ) なし

解説) 使用例を示す.

```
% for( i=0; i<100; i++ ) {  
%     ..... 処理 1.....  
%     if ( data != 0.0 ) {  
%         continue; /* ループ先頭 (処理 1) に処理が移る */  
%     }  
%     ..... 処理 2.....  
% }
```

関連項目) BREAK

ソースファイル

組み込み関数

機能) コマンドモジュールを定義する.

形式)

<code>define mod_name { stmt }</code>

パラメータ) 1. mod_name : モジュール名
2. stmt : パラメータ列

解説) モジュールの定義例を示す.

```
define SYSTEM {  
    set Command_Path "/usr/local/bin/sl-bin/SYSTEM/"  
    set Command_File  "/usr/local/bin/sl-bin/SYSTEM/COMMAND.SYSTEM"  
    set Message_File  "/usr/local/bin/sl-bin/SYSTEM/MESSAGE.SYSTEM"  
    set Error_File    "/usr/local/bin/sl-bin/SYSTEM/ERROR.SYSTEM"  
    set Setup_File    "/usr/local/bin/sl-bin/SYSTEM/SETUP.SYSTEM"  
    set Clean_File     "/usr/local/bin/sl-bin/SYSTEM/CLEAN.SYSTEM"  
}
```

関連項目) MODULE

ソースファイル

組み込み関数

機能) DO-WHILE 型のループ制御をする.

形式) `do { stmt } while (expr);`

パラメータ) 1. stmt : 処理 ({} で囲まれた複数のコマンドによる処理の記述ができる)
2. expr : 条件判定

解説) 1. expr が真 (0 以外) である間, stmt を繰り返し実行する.
2. コマンド末尾にセミコロン (;) が必要なので注意すること.
3. expr において, 論理演算子には AND 演算子 “&&” や “||”, 及び全ての関係演算子が使用できる. 論理演算の結果が 0 ならば偽, それ以外は真となる.

使用例) 処理を 100 回繰り返して実行する場合の記述例

```
% i=0
% do {
%     ..... 処理 .....
%     i++
% } while ( i<100 );
```

機能) 文字列を *SATELLITE* のコマンドとして評価する。

形式) `eval(string)`

パラメータ) string : 文字列

使用例) 例えば `inline` コマンドでは通常、引数に直接 `String` オブジェクトをとることができないが、`eval` コマンドを使用することで、これを記述することができる。

```
% string rdfile
% rdfile = "sample.sl"
%
% /* 次の記述ではエラーが発生 */
% inline( rdfile )
%
% /* 対処方法 */
% eval( "inline( \" "+rdfile+" \" )" )
```


EXIT

SHELL

機能) *SATELITE*シェルを終了する.

形式)

exit

パラメータ) なし

ソースファイル

組み込み関数

機能) オブジェクトの外部参照を宣言する.

形式) `external x, y, z, ...`

パラメータ) `x, y, z, ...` 外部参照とするオブジェクト名

解説) 宣言した変数は, トップレベルで使用している変数が参照される. 関数および手続き内での宣言のみ有効であり, 関数および手続きの定義中の先頭で行なう必要がある.

使用例) トップレベルで宣言した Series オブジェクト `x` を関数内で参照する場合の記述例

```
% n = 20
%
% series x
% x = 0~n/n
%
% func sinwave( a,f,th ) {
%     external x
%     series y
%
%     y = a*sin( 2*PI*f*x+th )
%
%     return y
% }
```

関連項目) FUNC, PROC

ソースファイル

組み込み関数

機能) for ループ制御をする

形式)

for (stmt1 ; expr ; stmt2) stmt3

パラメータ)

1. stmt1 : カウンタの初期化
2. expr : 条件判定
3. stmt2 : カウンタの再設定
4. stmt3 : 処理 ({} で囲まれた複数のコマンドによる処理の記述ができる)

解説)

1. stmt1, stmt2, expr に複文を記述することはできない.
2. for ループでは, まず stmt1 が実行され, 次に expr が真である間, stmt3 を実行し, stmt2 が実行される.
3. expr において, 論理演算子には AND 演算子 “&&” や “||”, 及び全ての関係演算子を使用できる. 論理演算の結果が 0 ならば偽, それ以外は真となる.

使用例) 処理を 100 回繰り返して実行する場合の記述例

```
% for( i=0; i<100; i++ ) {  
%     ..... 処理 .....  
% }
```

ソースファイル

組み込み関数

機能) 関数を定義する.

形式) `func function([arg1,...,argn]) stmt`

パラメータ)

1. function : 関数名
2. arg1,...,argn : 引数名
3. stmt : 処理 ({} で囲まれた複数のコマンドによる処理の記述ができる)

解説)

1. 引数, また返り値として, Scalar, Series, Snapshot, String 型のオブジェクトを扱うことができる.
2. return コマンドにより, 呼び出し元にデータを返すことができる.
3. 関数内で引数の内容の書き換えた場合, この変化は呼び出し元の対応する変数に影響する.

使用例) アスキーテキストファイルの数値データを Series オブジェクトに変換する関数の記述例

```
% func asciitoseries( filename ) {  
%     return 0 + unix( "cat " + filename )  
% }
```

関連項目) EXTERNAL, RETURN

ソースファイル

組み込み関数

機能) ガーベージ・コレクションを強制的に行なう.

形式) GarCo()

パラメータ) なし

解説) 未定義シンボルなどが削除される.

ソースファイル

組み込み関数

GOODBYE

SHELL

機能) 終了時のメッセージを表示する.

形式) `goodbye()`

パラメータ) なし

解説) `.clean.sl` に記述しておけば, *SATELLITE* 終了時に次のようなメッセージが表示される.

```
Exit The SATELLITE World      ... Thank you.
```

ソースファイル

組み込み関数

機能) ヒストリ (コマンド実行履歴) の大きさの設定, ヒストリの一覧を表示する.

形式) `history([hsiz])`

パラメータ) `hsiz` : ヒストリのサイズ

解説)

1. ヒストリサイズはデフォルトで 256 に設定されている.
2. ヒストリサイズを指定しない場合には, ヒストリの一覧が表示される.
3. ヒストリサイズに負値を与えると, ヒストリサイズが出力される.

ソースファイル

組み込み関数

機能) 条件分岐をする.

形式)

<code>if (expr) stmt1 [else { stmt2 }]</code>

パラメータ)

1. expr : 条件判定
2. stmt1 : 処理
3. stmt2 : 処理

解説)

1. else 文を記述する場合, stmt1 が, 単文であっても { } で囲む必要がある. また, } else { のように, } の直後に else を続けて記述する. 改行を入れてはいけない.
2. expr において, 論理演算子には AND 演算子 “&&” や “||”, 及び全ての関係演算子が使用できる. 論理演算の結果が 0 ならば偽, それ以外は真となる.

ソースファイル

組み込み関数

機能) オブジェクトのインデックスを得る.

形式) `idx = index(x)`

パラメータ) 1. x : オブジェクト (Series, Snapshot, String)
 2. idx : 要素数出力 (Series, Scalar)

解説) データのインデックスを出力する. 一次元データであれば Scalar 値が, 多次元データであれば Series 値で出力される. 例えば, インデックスが [10][50] のデータであれば, [0]:% 10 50 が得られる.

機能) *SATELLITE*言語のスクリプトを実行する.

形式) `inline("script")`

パラメータ) script : スクリプトファイル名

解説)

1. inline コマンドで使用するオブジェクトは, スクリプトの実行終了後も有効であり, func, proc とは異なる.
2. 戻り値はない.
3. inline を入れ子にした場合には, まずすべての inline で指定されたスクリプトがスタックコードに展開される. これを抑制し, 実行途中でスクリプトを読み込ませるには, eval コマンドを併用し, eval("inline \"script\") のようにする.

使用例) sample.sl を実行する

```
% inline( "sample.sl" )
```

機能) オブジェクト名が使用されているかどうかを調べる .

形式) `isdef(name)`

パラメータ) name : オブジェクト名

解説)

1. Scalar, Series, Snapshot, String 型のオブジェクト , もしくは定数として定義されている場合には 1 を返す .
2. オブジェクト名が定義されていない場合 0 を返す .
3. モジュール名 , func, proc などの名前で使われている場合には , -1 を返す .

使用例) sample.sl を実行する

```
% isdef( a );
```

ソースファイル

組み込み関数

機能) オブジェクトの要素数を得る.

形式) `num = length(x)`

パラメータ) 1. x : オブジェクト (Series, Snapshot, String)
2. num : 要素数出力 (Scalar)

解説) 多次元データの時系列方向の要素数を出力する. 例えば, インデックスが [10][50] のデータであれば, 出力は10である.

ソースファイル

組み込み関数

機能) コマンドモジュールを登録する.

形式) `module(mod_name)`

パラメータ) `mod_name` : モジュール名

解説)

1. モジュール名は, モジュールの諸パラメータの設定されたモジュールとして宣言されているものでなければならない.
2. 同じコマンド名を含むモジュールを登録した場合, 新しく登録したモジュールのコマンドの方が実行されるようになる.
3. モジュールの定義については, `DEFINE` を参照.
4. 標準モジュールとして, 現在 `SYSTEM`, `ISPP`, `GPM`, `BPS`, `NCS`, `NPE` が用意されており, モジュール名は定義済みである.

関連項目) `DEFINE`

ソースファイル

組み込み関数

機能) オブジェクトの内容を表示する.

形式)

```
print x
```

パラメータ) x : オブジェクト (Scalar, Series, Snapshot, String)

解説) すべてのデータを表示する.

ソースファイル

組み込み関数

機能) オブジェクトの内容を指定した形式で表示する.

形式) `printf(format, x [, y, ...])`

パラメータ) 1. format : フォーマット文字列
2. x, y ... : オブジェクト (Scalar, Series, Snapshot, String)

解説) フォーマット文字列の書式は, C 言語と同様である.

型	フォーマット文字列
整数	%d %nd
実数	%f %nf %n.mf
	%g %ng %n.mg
	%e %ne %n.me
文字 文字列	%c %nd
	%s %ns
改行 タブ	%n %r
	%t

使用例) 整数 i, 実数 a を表示する.

```
% printf("%4d : %8.3f\n",i,a);
```

ソースファイル

組み込み関数

機能) 手続きを定義する.

形式)

<code>proc method([arg1,...,argn]) stmt</code>
--

パラメータ)

1. method : 手続き名
2. arg1,...,argn : 引数名
3. stmt : 処理 ({ } で囲まれた複数のコマンドによる処理の記述ができる)

解説) 手続き内で引数を書き換えた場合, 呼出元の対応する変数に影響する.

使用例) 変数 object の内容を, unix コマンド more を使って表示する手続きの記述例

```
% proc dump( object ) {  
%     unix( "more " ) << object;  
% }
```

関連項目) EXTERNAL

ソースファイル

組み込み関数

機能) 指定した型のデータをキーボードから読み込む。

形式) `x = read(type)`

パラメータ) 1. x : 出力オブジェクト
2. type : データ型を表す文字列 ("scalar", "string" など)

解説) x には, キーボードから入力した値を指定した型に変換した値が入る。

ソースファイル

組み込み関数

機能) 指定されたデータを関数の呼出元に渡す。

形式) `return stmt`

パラメータ) 1. `stmt` : 評価式 (オブジェクトのみも含む)

解説) 関数の処理結果を呼出元に渡すコマンドである。複数のオブジェクトは指定できない。

関連項目) FUNC

ソースファイル

組み込み関数

機能) Scalar オブジェクトを宣言する

形式) `scalar x, y, z, ...`

パラメータ) `x, y, z, ...` : オブジェクト名

解説)

1. Scalar 型のオブジェクトは, 1 個の実数値が格納される変数である.
2. 宣言したオブジェクトの大きさおよび型は, コマンドの出力値が格納されることにより, 変更される可能性がある.

ソースファイル

組み込み関数

機能) Series オブジェクトを宣言する.

形式) `series x, y, z, ...`

パラメータ) `x, y, z, ...` : オブジェクト名

- 解説)
1. Series 型のオブジェクトは, 可変長の数列を格納するものであり, 宣言時に下位次元の大きさ (サブインデックス) を示さなければならない. 例えば, `series x[64][32], y[100]` などのように設定する. 前者では $n \times 64 \times 32$ の 3 次元配列, 後者では $n \times 100$ の 2 次元配列となる. 何も大きさを示さなかった場合には, 1 次元配列となる. 下位次元についてはその大きさは固定である. 最上位次元の n については可変であり, 宣言直後は 1 となっている.
 2. 宣言したオブジェクトの大きさおよび型は, コマンドの出力値が格納されることにより, 変更される可能性がある.
 3. `reform` コマンドによってオブジェクトの次元数・大きさを変更することができる.
 4. サブバッファの参照値 (`x[3]` など) のオブジェクトのクラスは `Snapshot` となる.

ソースファイル

組み込み関数

機能) Snapshot オブジェクトを宣言する.

形式) `snapshot x, y, z, ...`

パラメータ) `x, y, z, ...` : オブジェクト名

解説)

1. Snapshot 型のオブジェクトは, 大きさは固定であり, 外部コマンドの出力を代入しない限り, 宣言時に示した大きさから変わることはない.
2. reform コマンドによってオブジェクトの次元数・大きさを変更することができる.

ソースファイル

組み込み関数

機能) String オブジェクトを宣言する.

形式) `string x, y, z,`

パラメータ) `x, y, z, ...` : オブジェクト名

解説)

1. String 型のオブジェクトは, 複数の文字列を格納する配列である.
2. 大きさの設定方法は, Snapshot 型の場合と同じであり, それぞれの要素に文字列が格納される.
3. 宣言したオブジェクトの大きさおよび型は, コマンドの出力値が格納されることにより, 変更される可能性がある.

ソースファイル

組み込み関数

機能) 文字列の長さを得る

形式) `str = strlen(x)`

パラメータ) 1. x : String オブジェクト
2. str : 文字列の長さ出力 (Scalar)

ソースファイル

組み込み関数

機能) シンボルテーブルを表示する.

形式)

Symbols()

パラメータ) なし

解説) 定義されているシンボル(オブジェクト名, 定数名, モジュール名)を表示する.

ソースファイル

組み込み関数

機能) オブジェクトのクラスを得る

形式) `str = typeof(x)`

パラメータ) 1. x : オブジェクト (Scalar, Series, Snapshot, String)
2. str : オブジェクトのクラス出力 (String)

解説) データのオブジェクトのタイプが出力される。出力値はString 型であり、それぞれのオブジェクトクラスによって次の値が出力される。

Scalar 型	–	scalar
Series 型	–	series
Snapshot 型	–	snapshot
String 型	–	string

機能) 指定したオブジェクトの登録を削除する。

形式) `undef x [, y ...]`

パラメータ) `x, y` : オブジェクト

解説) *SATELLITE*シェルのシンボルテーブルから指定したオブジェクトを削除する。オブジェクトには、`func`, `proc` で定義した関数、手続きも含まれる。現在定義されているシンボルの一覧を得るコマンドは、`Symbols()` である。

ソースファイル

組み込み関数

機能) UNIX コマンドを実行する.

形式) `unix(command_statements)`

パラメータ) `command_statements` : UNIX コマンド文字列 (string オブジェクト)

解説) UNIX コマンドの出力は, *SATELLITE* には, String オブジェクトとして渡される.

使用例) 1. 数値データのテキストファイルを, Series オブジェクトとして読み込む

```
% x = 0 + unix( "cat data.txt" )
```

2. *SATELLITE* データを UNIX コマンドに渡す

```
% unix( "more" ) << x
```

ソースファイル

組み込み関数

WELCOME

SHELL

機能) *SATELLITE*起動時のメッセージを表示する.

形式) `welcome(["string"])`

パラメータ) `string` : メッセージの上・下側に表示するラインの文字を指定する場合には, 文字列を記述する.

解説) `.setup.sl` に記述しておけば, *SATELLITE*起動時に次のようなメッセージが表示される.

```
%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%
                        Welcome to The SATELLITE World
                Copyright (C) 1992 - 1999, BPEL, Toyohashi University of Technology
                        Version 2.92
%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%
```

ソースファイル

組み込み関数

WHILE

SHELL

機能) WHILE 型のループ制御をする.

形式) `while(expr) stmt1`

パラメータ) 1. expr : 条件判定
2. stmt1 : 処理 ({} で囲まれた複数のコマンドによる処理の記述ができる)

ソースファイル

組み込み関数

機能) データファイル書き込みフォーマットを設定する.

形式) `write_type(type, endian_type, datum_size)`

パラメータ) 1. type : データファイルのフォーマット
“new” – *SATELITE* 言語フォーマット
“old” – SATELITE MS-DOS フォーマット
2. endian_type : エンディアンの種類
“BigEndian” – SPARC, Mips などのプロセッサ
“LittleEndian” – Alpha, Intel プロセッサなど
3. datum_size : データ 1 要素のサイズ [byte] (2, 4, 8)

解説) old フォーマットでは, データサイズは 4 [byte] 固定である.

使用例) データサイズを double(8[byte]) で出力する場合の記述例

```
% write_type( "new", "BigEndian", 8 )
```

数学ライブラリ

Mathematic Library

機能) オブジェクトの内容の絶対値を求める。

形式) `abs(x)`

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト (Scalar, Series, Snapshot, File)

解説) 1. 処理
 $y_i = |x_i|$

ソースファイル

組み込み関数

機能) 逆余弦を求める.

形式) `acos(x)`

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト (Scalar, Series, Snapshot, File)

解説) 1. 処理
$$y_i = \cos^{-1} x_i$$

ソースファイル

組み込み関数

機能) 逆正弦を求める.

形式) `asin(x)`

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト (Scalar, Series, Snapshot, File)

解説) 1. 処理
$$y_i = \sin^{-1} x_i$$

ソースファイル

組み込み関数

機能) 逆正接を求める.

形式) atan(x)

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト (Scalar, Series, Snapshot, File)

解説) 1. 処理

$$y_i = \tan^{-1} x_i$$

ソースファイル

組み込み関数

機能) 逆正接を求める。

形式) `atan2(y, x)`

パラメータ) 1. y : 入力オブジェクト (Scalar, Series, Snapshot, File)
2. x : 入力オブジェクト (Scalar, Series, Snapshot, File)

解説) 1. 処理
$$z_i = \tan^{-1} \frac{y_i}{x_i}$$

ソースファイル

組み込み関数

機能) 余弦を求める.

形式) `cos(x)`

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト (Scalar, Series, Snapshot, File)

解説) 1. 処理

$$y_i = \cos x_i$$

ソースファイル

組み込み関数

機能) データの指数を計算する.

形式) `exp(x)`

パラメータ) x : 入力オブジェクト

解説) 1. 処理
$$y_i = e^{x_i}$$

ソースファイル

組み込み関数

機能) データの指数を計算する.

形式) `exp2(x)`

パラメータ) x : 入力オブジェクト (Scalar, Series, Snapshot)

解説) 1. 処理
 $y_i = 2^{x_i}$

ソースファイル

組み込み関数

機能) オブジェクトの内容の小数以下を切捨てた値を求める.

形式) `int(x)`

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト (Scalar, Series, Snapshot, File)

解説) 1. 処理
 $y_i = \lceil x_i \rceil$

ソースファイル

組み込み関数

機能) データの自然対数を計算する.

形式) `log(x)`

パラメータ) x : 入力オブジェクト (Scalar, Series, Snapshot)

解説) $y_i = \log_e x_i$

ソースファイル

組み込み関数

LOG2

Mathematic Library

機能) データの、底が2の対数を計算する.

形式) `log2(x)`

パラメータ) x : 入力オブジェクト (Scalar, Series, Snapshot)

解説) $y_i = \log_2 x_i$

ソースファイル

組み込み関数

LOG10

Mathematic Library

機能) データの常用対数を計算する.

形式) `log10(x)`

パラメータ) x : 入力オブジェクト (Scalar, Series, Snapshot)

解説) $y_i = \log_{10} x_i$

ソースファイル

組み込み関数

MOD

Mathematic Library

機能) 剰余を求める.

形式 1) `mod(x, y)`

形式 2) `x % y`

パラメータ) x, y : 入力オブジェクト (Scalar, Series, Snapshot)

解説) $z_i = x_i \% y_i$

ソースファイル

組み込み関数

機能) 累乗を求める

形式 1) `pow(x, y)`

形式 2) `x^y`

パラメータ) `x` , `y` : 入力オブジェクト (Scalar, Series, Snapshot)

解説) $z_i = x_i^{y_i}$

ソースファイル

組み込み関数

機能) 符号を得る.

形式) `sgn(x)`

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト (Scalar, Series, Snapshot, File)

解説) 1. 処理

$$y_i = \text{sgn}(x_i) = x_i / |x_i|$$

-1, 0, 1 のいずれかを返す. 実際の処理では符号を判定している.

ソースファイル

組み込み関数

機能) 正弦を求める.

形式) `sin(x)`

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト (Scalar, Series, Snapshot, File)

解説) 1. 処理
$$y_i = \sin x_i$$

ソースファイル

組み込み関数

SQRT

Mathematic Library

機能) 平方根を求める.

形式) `sqrt(x)`

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト (Scalar, Series, Snapshot)

解説) $y_i = \sqrt{x_i}$

ソースファイル

組み込み関数

機能) 正接を求める

形式) `tan(x)`

パラメータ) x : 入力オブジェクト (Scalar, Series, Snapshot)

解説) $y_i = \tan x_i$

ソースファイル

組み込み関数

ユーティリティ

SL_UTIL

機能) ファイルがあるか調べる関数.

形式) `flag = exist(filename)`

パラメータ) 1. filename : 対象ファイル名 (string)
 2. flag : 結果. (flag = 1 : 存在, flag = 0 : 存在しない)

ソースファイル

slutil.sl

機能) 変数の内容を表示する.

形式) `dump(x)`

パラメータ) `x` : 入力オブジェクト

解説) 表示にはUNIX コマンド `less` を用いている.

ソースファイル

slutil.sl

機能) 変数のインデックスを変更し, 元の値をそのままはめ込む.

形式) `y = extract(x,index)`

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト
2. index : 変更後のインデックス
3. y : 出力オブジェクト

解説) `reform` では, 大きさは変更できるが, 値は先頭から順番に詰め込まれる. 本関数は元のデータの並びを保ち, 且つインデックスを変更したい場合に用いるとよい.

参照) REFORM

ソースファイル

func_lib.sl

機能) データファイルのインデックスを得る.

形式) `index = fileindex(filename)`

パラメータ) 1. filename : 対象ファイル名 (string)
2. index : 対象ファイル名のインデックス

ソースファイル

func_lib.sl

機能) `get` の機能を内部コマンドのみで実現した関数.

形式) `y = hget(x, pos)`

パラメータ)

1. `x` : 入力オブジェクト
2. `pos` : データの座標
3. `y` : 指定した位置のデータ (scalar)

参照) `GET`

ソースファイル

func_lib.sl

機能) 変数の全体の要素数を求める

形式) `IndexSize(x)`

パラメータ) `x` : 入力オブジェクト

解説) `length(x)` では、多次元の場合の全体の要素数が分からないが、この関数を使えば、全体の要素数がわかる。

ソースファイル

slutil.sl

PUTS

SL_UTIL

機能) C 言語の puts と同機能.

形式) puts(x)

パラメータ) x : オブジェクト

ソースファイル

slutil.sl

機能) 時間軸方向を逆転する.

形式) `y = revTime(x)`

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト (series)
2. y : 出力オブジェクト (series)

解説) 多次元データでは, reverse の結果と異なる.

参照) REVERSE

ソースファイル

slutil.sl

機能) 指定した変数を, scalar 型の値にして返す.

形式) `y = Scalar(x)`

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト
2. y : 出力 (scalar)

解説) 1つの実数値が返される. series などは, 先頭の値が変換される.

参照) Snapshot, Series, String

ソースファイル

slutil.sl

機能) 指定した変数を series 型にした値を返す.

形式) `y = Series(x)`

パラメータ) 1. x : 入力
2. y : 出力 (series)

参照) Scalar, Snapshot, String

ソースファイル

slutil.sl

機能) 指定した変数を snapshot 型にした値を返す.

形式) `y = Snapshot(x)`

パラメータ) 1. x : 入力
2. y : 出力 (snapshot)

参照) Scalar, Series, String

ソースファイル

slutil.sl

機能) 数値を指定した形式で, 文字列に変換する.

形式) `str = sprintf(format, x)`

パラメータ)

1. format : 出力フォーマット (string)
2. x : データ (scalar)
3. str : 出力文字列 (string)

解説)

1. format は, printf と同じでよい. ただし, 小数点以下の桁数指定のみ有効. スペースはいくつあっても1つになる.
2. 指定できる変数は1つだけである.

参照) Sprintf

ソースファイル

slutil.sl

機能) 多引数版 sprintf 関数

形式) Sprintf(format, x1, [x2, ..., x15])

パラメータ) 1. format : 出力フォーマット (string)
2. x1 : 出力したいオブジェクト

解説) format は, printf と同じ記述方法. 引数が多数指定できる (15個まで). フォーマット文字列に含まれるスペースは, その数だけ出力される.

ただし, 引数に指定できるのは, scalar 値のみであり, series, snapshot 値が指定された場合は, その先頭の値のみを処理する.

参照) sprintf

ソースファイル

Sprintf.c

機能) 指定した変数を String 型にした値を返す.

形式) `y = String(x)`

パラメータ) 1. x : 入力
2. y : 出力 (string)

参照) Scalar, Snapshot, Series

ソースファイル

slutil.sl

TEXT2STRING

SL_UTIL

機能) テキストファイルの内容を string データに変換する.

形式 `str = text2string(filename)`

パラメータ) 1. filename : テキストファイル名 (string)
2. str : 出力 (string)

解説) データの区切り文字は, スペース, タブ, 改行 である.

参照) TEXT2BUFFER, BUFFER2TEXT

ソースファイル

slutil.sl

機能) 単位行列を生成する.

形式) `Imat = unitMat(dim)`

パラメータ) 1. dim : 次元数 (scalar)
 2. Imat : 出力 (snapshot)

ソースファイル

slutil.sl

機能) 小文字に変換した文字列を返す.

形式) `toLowerCase(string)`

パラメータ) `string` : 入力文字列 (`string`)

使用例)

```
% toLower("toLowerCase");
          tolower
```

参照) TOUPPER

ソースファイル

`toLowerCase.c`

機能) 大文字に変換した文字列を返す.

形式) `toUpper(string)`

パラメータ) `string` : 入力文字列 (`string`)

使用例)

```
% toUpper("toUpper");  
TOUPPER
```

参照) TOLOWER

ソースファイル

toUpper.c

基本コマンド

SYSTEM

機能) バッファモニター

形式) `bm(x)`

パラメータ) `x` : オブジェクト

解説)

1. オブジェクト `x` の変化を逐次グラフ表示する.
2. バッファモニターを実行中に, モニタリング対象のオブジェクトを再宣言すると, バッファモニターは機能しなくなるため, 注意が必要.

ソースファイル

`bm/*.c`

機能) オブジェクトの一部を取り出す.

形式) `y = cut(x, start, end)`

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト (Series , Snapshot)
 2. y : 出力オブジェクト (Series)
 3. start : 切り取るデータの始点座標
 4. end : 切り出すデータの終点座標 (>start)

解説) 1. x の start から , end の位置までのデータを取り出す.
 2. start, end には, x が多次元データならば index (Series) を, 1次元データならば data point (Scalar) を設定する.

使用例) 2次元の場合

```
[0]:[0]%  1   2   3   4   5
[1]:[0]%  6   7   8   9  10
という x に対し,
cut(x, (0,1), (0,3)) を実行すると,
[0]:[0]%  2   3   4
```

ソースファイル

cut.c

機能) オブジェクトの指定した範囲を指定した値で埋める.

形式) `y = fill(x, start, end, value)`

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト (Series , Snapshot)
2. y : 出力オブジェクト (Series)
3. start : 始点座標
4. end : 終点座標 (>start)
5. value : 埋める数値 (Scalar)

解説) 1. x の start から , end の位置までの範囲を value の値で満たす (value = 0 の場合は, “zero” コマンドと等価).
2. start, end には, x が多次元データならば index (Series) を, 1次元データならば data point (Scalar) を設定する.

使用例) 2次元の場合

```
[0]:[0]%  1   2   3   4   5
[1]:[0]%  6   7   8   9  10
という x に対し,
fill(x,(0,1),(0,3),30) を実行すると,
[0]:[0]%  1  30  30  30   5
[1]:[0]%  6   7   8   9  10
```

ソースファイル

fill.c

機能) 入力オブジェクトから指定した値に最も近いデータを見つけ、値とその位置を表示し、位置を Series オブジェクトとして返す。

形式) `ip = find(x, val, num)`

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト (Series, Snapshot)
2. ip : データの位置 (Series)
3. val : 探し出す値
4. num : 探し出すデータの個数

解説) 1. 入力オブジェクト内から val に最も近い値を持つインデックスの系列を取得する。
2. インデックスの系列は、次元数分の要素を持ち、時間方向に num 個得られる。
3. 取得するデータ数が1個で、かつ1次元データの位置を示す場合には戻り値は、Scalar オブジェクトである。

使用例) 1次元の場合

```
[0]:% 11 12 13 14 15
という x に対し,
find(x,14,1) を実行すると,
3
find(x,14,3) を実行すると,
[0]:[0]% 3
[1]:[0]% 4
[2]:[0]% 2
```

2次元の場合

```
[0]:[0]% 11 12 13 14 15
[1]:[0]% 16 17 18 19 20
という x に対し,
find(x,14,3) を実行すると,
[0]:[0]% 0 3
[1]:[0]% 0 4
[2]:[0]% 0 2
```

ソースファイル

find.c

機能) オブジェクトの指定した位置の値を得る.

形式) `y = get(x, position)`

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト (Series , Snapshot)
2. y : 指定した位置のデータ値 (Scalar)
3. position: データの座標

解説) 1. x の position の位置のデータ値を返す.
2. position には, x が多次元データならば index (Series) を, 1次元データならば data point (Scalar) を設定する.

使用例) 2次元の場合

```
[0]:[0]%  1   2   3   4   5
[1]:[0]%  6   7   8   9  10
という x に対し,
get(x,(0,3))を実行すると,
[0]:[0]%  4
```

ソースファイル

get.c

機能) データファイルの情報を表示, 変更する.

形式) `header(file_name, mode)`

パラメータ) 1. file_name : データファイル名

2. mode : モード

(a) 0 : 画面に表示する.

(b) 1 : 変更する.

解説) 1. データファイル file_name の情報を, mode に従って処理する.

2. データファイル名は, “ ” で囲む必要がある.

3. 表示・変更される情報には, Byte Order, Data size, Owner, Date, Comment, Sampling frequency, Dimension, Index などがある.

ソースファイル

header.c

機能) コマンドマニュアルを表示する.

形式) `help(com_name)`

パラメータ) `com_name` : コマンド名

解説) 1. コマンド `com_name` の機能, 形式, パラメータなどを表示する.
 2. コマンド名は, “ ” で囲む必要がある.

機能) データを指定したステップ数で間引く.

形式) `y = mabi(x, step)`

パラメータ) 1. x : 入力時系列 (Series)
2. y : 出力時系列 (Series)
3. step : 間引きの間隔 (> 1)

解説) 1. 入力時系列のstep-1点分のデータを間引いて出力する.
2. step=0および1の場合はデータは変化しない.
3. stepには, x が多次元データならば Series を, 1次元データならば Scaler を設定する.
4. 多次元オブジェクトの入力に対しては, 次のように間引かれる.
5 × 10 の2次元オブジェクトの場合

```
y = mabi( x, (2, 3) );
y には,
```

y : [0]	x ₀₀	x ₀₃	x ₀₆	x ₀₉
y : [1]	x ₂₀	x ₂₃	x ₂₆	x ₂₉
y : [2]	x ₄₀	x ₄₃	x ₄₆	x ₄₉

が, 出力される.

使用例) 1次元の場合

```
[0]:% 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
という x に対し,
mabi(x,2) を実行すると,
[0]:% 1 3 5 7 9
```

2次元の場合

```
[0]:[0]% 11 12 13 14 15
[1]:[0]% 16 17 18 19 20
[2]:[0]% 21 22 23 24 25
[3]:[0]% 26 27 28 29 30
[4]:[0]% 31 32 33 34 35
という x に対し,
```

```
mabi(x,(2,3)) を実行すると,  
[0]:[0]%  11   14  
[1]:[0]%  21   24  
[2]:[0]%  31   34
```

ソースファイル

mabi.c

機能) データの最大値を得る.

形式) $y = \max(x)$

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト (Series, Snapshot)
2. y : 最大値 (Scalar)

ソースファイル

max.c

機能) データの最大値のデータ位置を得る.

形式) `y = maxpos(x, num)`

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト (Series, Snapshot)
2. y : 位置格納オブジェクト (Series)
3. num : 取得するデータ位置の数 (≥ 1)

解説) 1. 入力オブジェクト内で最も大きな値を持つインデックスの系列を取得する.
2. インデックスの系列は, 次元数分の要素を持ち, 時間方向に num 個得られる.
3. 取得するデータ数が1個で, かつ1次元データの位置を示す場合には戻り値は, Scalar オブジェクトである.

使用例) 1次元の場合

```
[0]:% 13 12 15 11 14
という x に対し,
maxpos(x,1) を実行すると,
2
maxpos(x,3) を実行すると,
[0]:[0]% 2
[1]:[0]% 4
[2]:[0]% 0
```

2次元の場合

```
[0]:[0]% 13 17 15 11 18
[1]:[0]% 20 12 16 19 14
という x に対し,
maxpos(x,3) を実行すると,
[0]:[0]% 1 0
[1]:[0]% 1 3
[2]:[0]% 0 4
```

ソースファイル

maxpos.c

機能) 2つのオブジェクトのデータを連結する.

形式) `z = merge(x, y)`

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト 1 (Series , Snapshot)
2. y : 入力オブジェクト 2 (Series , Snapshot)
3. z : 出力オブジェクト (Series)

解説) 1. z には, x の終端に y を連結したデータが出力される.
2. 多次元データの場合には, サブインデックスが一致しなければ連結しない.

使用例) 2次元の場合

x :	y :
[0]:[0]% 1 2	[0]:[0]% 30 31
[1]:[0]% 3 4	[1]:[0]% 32 33
[2]:[0]% 5 6	[2]:[0]% 34 35
[3]:[0]% 7 8	

に対し, `merge(x,y)` を実行すると,

[0]:[0]% 1 2
[1]:[0]% 3 4
[2]:[0]% 5 6
[3]:[0]% 7 8
[4]:[0]% 30 31
[5]:[0]% 32 33
[6]:[0]% 34 35

ソースファイル

merge.c

機能) データの最小値を得る.

形式) $y = \min(x)$

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト (Series , Snapshot)
2. y : 最小値 (Scalar)

ソースファイル

min.c

機能) データの最小値のデータ位置を得る.

形式) `y = minpos(x, num)`

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト (Series , Snapshot)
 2. y : 位置格納オブジェクト (Series)
 3. num : 取得するデータ位置の数 (≥ 1)

解説) 1. 入力オブジェクト内で最も小さな値を持つインデックスの系列を取得する.
 2. インデックスの系列は, 次元数分の要素を持ち, 時間方向に num 個得られる.
 3. 取得するデータ数が 1 個で, かつ 1 次元データの位置を示す場合には戻り値は, Scalar オブジェクトである.

使用例) 1次元の場合

```
[0]:% 13 12 15 11 14
という x に対し,
minpos(x,1) を実行すると,
3
minpos(x,3) を実行すると,
[0]:[0]% 3
[1]:[0]% 1
[2]:[0]% 0
```

2次元の場合

```
[0]:[0]% 13 17 15 11 18
[1]:[0]% 20 12 16 19 14
という x に対し,
minpos(x,3) を実行すると,
[0]:[0]% 0 3
[1]:[0]% 1 1
[2]:[0]% 0 0
```

ソースファイル

minpos.c

機能) オブジェクトの一部に, 別のデータを入れる.

形式) `z = put(x, y, index)`

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト (Series, Snapshot)
2. y : 挿入オブジェクト (Series, Snapshot)
3. z : 出力オブジェクト (Series)
4. index : y を書き込む座標

解説) 1. x の index の位置から, y の内容を上書きしたデータを出力する. ただし z は, x の時間軸方向の長さに依存する.
2. x が多次元ならば index は Series 値で, 1次元ならば Scalar 値で設定する.
3. 多次元データの場合には, サブインデックスが一致しなければ上書きしない.

使用例) 2次元の場合

x :		y :
[0]:[0]%	1 2	[0]:[0]% 30 31
[1]:[0]%	3 4	[1]:[0]% 32 33
[2]:[0]%	5 6	[2]:[0]% 34 35
[3]:[0]%	7 8	
[4]:[0]%	9 10	

に対し, `put(x,y,(1,0))` を実行すると,

[0]:[0]%	1 2
[1]:[0]%	30 31
[2]:[0]%	32 33
[3]:[0]%	34 35
[4]:[0]%	9 10

が得られる.

ソースファイル

put.c

機能) オブジェクトのフォーマットを変更する.

形式) `y = reform(x, index)`

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト (Series , Snapshot)
 2. y : 出力オブジェクト (Series)
 3. index : データサイズ (Scalar , Series)

解説) 1. 指定したサイズが入力オブジェクトより大きい場合には, データの後部に0詰めを行ない, 入力オブジェクトより小さい場合には, データの削除を行なって, オブジェクトのフォーマットを変更する.
 2. x が多次元ならば index は Series 値で, 1次元ならば Scalar 値で設定する.

使用例) x = (1,2,3,4,5,6,7,8,9,10) に対し,
 reform(x,(2,5)) を実行すると,
 [0]:[0]% 1 2 3 4 5
 [1]:[0]% 6 7 8 9 10
 reform(x,(2,7)) を実行すると,
 [0]:[0]% 1 2 3 4 5 6 7
 [1]:[0]% 8 9 10 0 0 0 0
 reform(x,(2,3)) を実行すると,
 [0]:[0]% 1 2 3
 [1]:[0]% 4 5 6

ソースファイル

reform.c

機能) 入力データの配列を逆にしたデータを得る.

形式) `y = reverse(x)`

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト (Series , Snapshot)
2. y : 出力オブジェクト (Series)

使用例) 多次元データに使用した場合, 次のような結果になる.
2次元の場合

[0]:[0]%	1	2	3	4	5	[0]:[0]%	10	9	8	7	6
[1]:[0]%	6	7	8	9	10	[1]:[0]%	5	4	3	2	1

ソースファイル

reverse.c

機能) オブジェクトの内容を, 指定した位置が先頭となるように移動する.

形式) `y = rotate(x, index)`

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト (Series, Snapshot)
 2. y : 出力オブジェクト (Series)
 3. index : 先頭にする座標

解説) 1. データの先頭から index までのデータは, オブジェクトの最後に移動される.
 2. index が負であった場合, |index| の位置に入力の先頭が移動される.
 3. x が多次元ならば index は Series 値で, 1次元ならば Scaler 値で設定する.

使用例) 2次元の場合

```
[0]:[0]%  1   2   3   4   5
[1]:[0]%  6   7   8   9  10
という x に対し,
rotate(x,(0,3)) を実行すると,
[0]:[0]%  4   5   1   2   3
[1]:[0]%  9  10   6   7   8
rotate(x,(0,-3)) を実行すると,
[0]:[0]%  3   4   5   1   2
[1]:[0]%  8   9  10   6   7
```

ソースファイル

rotate.c

機能) サンプルング周波数を変更する.

形式) `sam(frequency)`

パラメータ) frequency : サンプルング周波数 (Scalar)

解説)

1. サンプルング周波数を, 指定した値に変更する. ただし, frequency のデフォルトは 1000.0 である.
2. 戻り値には, 設定値を返す.
3. 引数に 0 以下の数値を渡した場合, サンプルング周波数の変更は行なわれない.
4. ここで設定するサンプルング周波数は, ISPP モジュールのコマンドや, GPM モジュールの “graph” コマンドに参照される.

ソースファイル

sam.c

機能) リターンキーが押されるまで待つ.

形式) `wait()`

パラメータ) なし.

解説) デモンストレーションなどで, 画面を静止状態にしたい場合などに用いる.

ソースファイル

wait.c

機能) データの指定した範囲に0を詰める.

形式) `y = zero(x, start, end)`

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト (Series, Snapshot)
2. y : 出力オブジェクト (Series, Snapshot)
3. start : 始点データ座標
4. end : 終点データ座標 (>start)

解説) 1. x の start から end の範囲を0にした結果が y に出力される.
2. start, end には, x が多次元ならば index (Series) を, 1次元ならば data point (Scalar) を設定する.

使用例) 2次元の場合

```
[0]:[0]%  1   2   3   4   5
[1]:[0]%  6   7   8   9  10
という x に対し,
zero(x,(0,1),(0,3)) を実行すると,
[0]:[0]%  1   0   0   0   5
[1]:[0]%  6   7   8   9  10
```

ソースファイル

zero.c

ディジタル信号処理

ISPP

機能) Akima の補間法により , 1 次元系列の入出力データ対 x, y を補間した系列 xip, yip を求める .

形式 1) `yip = akima (x, y, xip)`

形式 2) `yip = akima (x, y, dpt [, xip2])`

パラメータ) 1. x : 入力系列 (1 次元 Series)
 2. y : 出力系列 (1 次元 Series)
 3. dpt : 補間後のデータ点数 (>0), サンプル周波数からデータ点数 , 補間後の入力系列を求める ($=0$).
 4. xip : 補間後の入力系列 (1 次元 Series)
 5. yip : 補間後の出力系列 (1 次元 Series)
 6. $xip2$: 自動生成された補間後の入力系列 (1 次元 Series)

解説) 1. x, y は同じデータ点数でなければならない .
 2. x および xip は , とともに $x_i < x_{i+1}$ の関係を満たしていなければならない .

形式 1 について: • xip の系列と対になる yip が求められる .
 • xip の値の範囲は x の値の範囲を超えてはならない .

形式 2 について: • $dpt = 0$ の場合は , サンプル周波数をもとに , 以下の定義により , xip が自動生成される .

$$xip_0 = x_0, xip_i = x_0 + step \times i, \dots, xip_{dpt-1} = x_{n-1}$$

ここで $step = 1.0/sf, dpt = (x_{n-1} - x_0) \times sf + 1$,
 ただし sf はサンプル周波数 n は x のデータ点数 .

• $dpt > 0$ の場合は , 上式の $step$ を次式として xip が生成される .

$$\begin{aligned} dpt > 1 \text{ のとき} & \quad step = (x_{n-1} - x_0) / (dpt - 1) \\ dpt = 1 \text{ のとき} & \quad step \text{ は } 0 \end{aligned}$$

• 第 4 引数 $xip2$ には , 自動生成された補間後の入力系列 xip が格納される .

参照) SPLINE

ソースファイル

akima.c

機能) 任意の経験分布関数に従う乱数を生成する.

形式) `x = arand(dpt, seed, f, min, max)`

パラメータ) 1. x : 出力時系列 (Series)
 2. dpt : 出力データ点数
 3. seed : 乱数の初期値 (奇数)
 4. f : 経験分布関数バッファ (Series, Snapshot)
 5. min : 経験分布関数定義域下限 (乱数最小値)
 6. max : 経験分布関数定義域上限 (乱数最大値)

解説) 1. 乱数のシードは, M系列を用いて生成している.
 2. 乱数生成のアルゴリズムは, 逆関数法を用いている.
 3. 経験分布関数fの値域は, 0 ≤ f ≤ 1の区間に入っていなければならない.

使用例) コーシー分布に従う乱数を発生させる.

```
func cauchy(x) {                                     #
    return 1 / (PI * (x^2 + 1));                     #   コーシー分布の
}                                                       #   密度関数定義

series f;
x = (0~999) / 1000 - 0.5;                             #   分布関数の定義域設定
ff = cauchy(x);                                         #   密度関数の値設定
a = integ(ff,f);                                       #   密度関数を積分する
f = f / a;                                             #   経験分布関数の設定
data = arand(1024,1,f,min(x),max(x)); #   乱数生成
```

ソースファイル

arand.c

機能) 線形 AR モデルに従う信号を生成する.

形式) `x = argen(para, dpt)`

- パラメータ)
1. para : パラメータ (Scalar, Series, Snapshot)
 - 0 : パラメータを会話的に設定し, オブジェクト x に書き込む.
 - オブジェクト名 : パラメータを para から読み込んで実行する.
 2. x : 出力時系列 (Series)
 3. dpt : 出力データ点数 (Scalar)

- 解説)
1. para が 0 の場合はパラメータを会話的に設定し, 出力オブジェクトに返す. para が オブジェクト名の場合は, 指定したパラメータバッファからパラメータを読み込んで, AR 信号を生成する.
 2. パラメータ設定は, 画面にコメントが表示されるので, それに従って数値を入力すればよい.
 3. パラメータのフォーマットは, 次の通りである.
 - [0] 入力正規乱数の初期値 (NRAND コマンドの init と同じく, 奇数)
 - [1] Ignored Iteration (*ii*)
 - [2] AR モデルの次数 (n)
 - [3] AR モデルの係数 (次数 1)
 - ⋮
 - [n+2] AR モデルの係数 (次数 n)
 - [n+3] 入力正規乱数の分散 (入力分散)
 4. はじめの *ii* 個は出力されず, その後の dpt 個のデータが x に出力される.
 5. 入力正規乱数は NRAND と同じモジュールを使用.
 6. 入力分散が設定されていない場合は 1.0 とする.
 7. BURG, LEVIN コマンドで得られたパラメータオブジェクトは直接使用できない(以下の使用例を参照).

使用例)

$$x_k + 0.8x_{k-1} = e_k, \quad e_k \sim N(0.0, 2.0)$$

に従う信号を生成する.

- パラメータ バッファ para の生成

```

% para = argen(0,0);
Init : 3                                # 入力乱数の初期値 (奇数)
Ignored Iteration : 10                  # Ignored Iteration
Order of AR : 1                         # AR モデルの次数
AR Coef[ 1] : 0.8                       # AR 係数
Input Variance : 2.0                   # 入力分散

% para                                # 設定されたパラメータ
[0]:% 3 10 1 0.8 2                     # バッファの内容

```

- 信号の生成

```

% x = argen(para,1024)                  # para の内容に従って 1024
                                         # 点データを生成

```
- BURG,LEVIN コマンドで求めたパラメータ para を使用する場合 (入力分散 1.0)

```

% tmp = (3,10,length(para))            # Init, Order を格納
% para2 = merge(tmp,para);
% para2:[length(para2)] = 1.0          # 入力分散

```

信号生成には para2 を用いる.

参照) BURG, LEVIN

AVERAGE

ISPP

機能) 指定したオブジェクトの平均値を求める.

形式) `y = average(x)`

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト (Series , Snapshot)
2. y : 平均値 (Scalar)

ソースファイル

average.c

機能) バタワース特性の IIR 型バンドパスフィルタを設計する.

形式) `gain = bpbtw(fc1, fc2, order, zr, zi, pr, pi)`

パラメータ) 1. fc1 : 遮断周波数 (低周波数側) (入力) [Hz] (Scalar)
2. fc2 : 遮断周波数 (高周波数側) (入力) [Hz] (Scalar)
3. order : フィルタ次数 (入力) (Scalar)
4. zr : 零点 (実数部) 出力 (Series)
5. zi : 零点 (虚数部) 出力 (Series)
6. pr : 極 (実数部) 出力 (Series)
7. pi : 極 (虚数部) 出力 (Series)
8. gain : ゲイン (Scalar)

解説) 設計値は, iircoef を使用すれば直接型 IIR フィルタの係数に変換できる.

使用例) ISPP User's Manual 3.2 節 フィルタ処理 参照.

参照) LPBTW, HPBTW, IIRCOEF

ソースファイル

bpbtw.c

機能) 時系列に線形 AR モデルをあてはめ, Burg 法を用いて AR 係数を求め, パワースペクトルを出力する.

形式) `burg(x, pw, ret1, mode, odr, dpt, tola, ret2)`

パラメータ) 1. x : 入力時系列 (Series , Snapshot)
 2. pw : 出力時系列:パワースペクトル (Series)
 3. ret1 : 出力 1 (Series)
 4. mode : モード (0, "A", "E", "K", "F", "C")
 5. odr : モデルの最大次数
 6. dpt : パワースペクトルの出力データ点数
 7. tola : 次数を下げる基準 (0, 1, 2 or 3)
 8. ret2 : 出力 2 (Series)

解説) 1. 各モードの計算方式と出力の関係は以下の通り.
 0 AIC_{min} で計算 : 出力 1 = AIC, 出力 2 = AR 係数
 A AIC_{min} で計算. ただし AIC_{min} の値と tola 以内であれば, 次数の少ない方を選択する. 出力は "0" と同じ.
 E odr の次数で計算 : 出力 1 = 誤差分散, 出力 2 = AR 係数
 K odr の次数で計算 : 出力 1 = 反射係数, 出力 2 = AR 係数
 F odr の次数で計算 : 出力 1 = 反射係数, 出力 2 = 誤差系列
 C odr の次数で計算 : 出力 1 = 出力 2 = AR 係数
 2. 入力データは, DCCUT コマンドにより直流成分を除去しておく.

使用例)

$$x_k + 0.8x_{k-1} = e_k, \quad e_k \sim N(0.0, 1.0)$$

に従う信号のパワースペクトルと AR 係数を求める (odr:固定).

```
% x = argen(para,1024);           # 信号の生成.

% series pw,sigma,coef;           # Series 変数の宣言.
% burg(x,pw,sigma,"E",1,64,1,coef); # 推定.
odr= 1
ndpt= 64
tola= 1.000000
```

```

p[ 1 ] = 0.956714
AR COEFFICIENT( 1)= 0.7914491

% coef
[0]:% 0.7914

```

参照) LEVIN

ソースファイル

burg.c

機能) 指定したオブジェクトの複素ケプストラムを算出する.

形式) `cep(x, y, u, v)`

パラメータ) 1. x : 入力時系列:実部 (Series , Snapshot)
 2. y : 入力時系列:虚部 (Series , Snapshot)
 3. u : 出力時系列:実部 (Series)
 4. v : 出力時系列:虚部 (Series)

解説) 1. y に 0 を入力した場合は, 虚部のデータに全て 0 が入力されたとして処理する.
 2. 出力 u,v は予め宣言しておく必要がある.

参照) ICEP

ソースファイル

cep.c

機能) 指定したオブジェクトの内容の直流成分を除去する.

形式) `y = dccut(x)`

パラメータ) 1. x : 入力時系列 (Series , Snapshot)
2. y : 出力時系列 (Series)

解説) データの平均値を引いたものが出力される.

ソースファイル

dccut.c

機能) 2次元データを行列とみなし, 行列式の値を計算する.

形式) $y = \det(x)$

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト (Series, Snapshot)
2. y : 計算値 (Scalar)

解説) 1. 正方行列のみ計算可能
2. 3次元以上のデータは, 下位の2次元データを配列とみなし, すべての配列について行列式を計算し, Series を返す.

使用例) 3次元以上のデータの場合

```
% matrix                                     # 入力データ
[0]:[0] [0]%                                1                0
[0]:[1] [0]%                                0                1

[1]:[0] [0]%                                0                1
[1]:[1] [0]%                                1                0

[2]:[0] [0]%                                1                2
[2]:[1] [0]%                                -2               1

% det(matrix);
[0]:%                                         1                -1          5 # 計算結果
```

参照) INV

ソースファイル

det.c

機能) 2次元データを行列とみなし, 固有値および固有ベクトルを数値的に求める.

形式) `eigen(x, vec, val)`

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト (Series, Snapshot)
 2. vec : 出力オブジェクト : 固有ベクトル (Series)
 3. val : 出力オブジェクト : 固有値 (Series)

解説) 1. 実対称行列のみ計算可能である.
 2. 固有値はハウスホルダー法による直交変換により求めている.
 3. あらかじめ, vec および val は Series 変数として宣言しておく必要がある.

使用例) 行列 $\begin{pmatrix} 2 & -1 \\ -1 & 2 \end{pmatrix}$ の固有値, 固有ベクトルを求める.

```
% matrix                                # 入力
[0][0]%                                2          -1
[1][0]%                                -1          2

% series vec, val                       # 出力を格納する変数宣言

% eigen(matrix,vec,val);
0

% val                                    # 固有値
[0]:%                                    3          1

% vec                                    # 固有ベクトル
[0]:[0]%                                -0.7071     -0.7071

[1]:[0]%                                0.7071     -0.7071
```

機能) 複素数入力データの離散フーリエ変換値, または逆変換値を計算する.

形式) `fftc(flg, x, y, u, v)`

パラメータ) 1. flg : 計算方式フラグ (P or I)
P 正フーリエ変換
I 逆フーリエ変換
2. x : 入力時系列:実部 (Series , Snapshot)
3. y : 入力時系列:虚部 (Series , Snapshot)
4. u : 出力時系列:実部 (Series)
5. v : 出力時系列:虚部 (Series)

解説) 1. 入力 x,y の長さは 2 の巾乗にしなければならない.
2. 出力 u,v は予め宣言しておく必要がある.

使用例) ISPP User's Manual 3.1 節 フーリエ変換 参照.

参照) SPCF,FFTN

ソースファイル

fftc.c

機能) 多次元複素数入力データの離散フーリエ変換値, または逆変換値を計算する.

形式) `fftn(flg, x, y, u, v)`

パラメータ) 1. flg : 計算方式フラグ (P or I)
 P 正フーリエ変換
 I 逆フーリエ変換
 2. x : 入力オブジェクト:実数部 (Series, Snapshot)
 3. y : 入力オブジェクト:虚数部 (Series, Snapshot)
 4. u : 出力オブジェクト:実数部 (Series, Snapshot)
 5. v : 出力オブジェクト:虚数部 (Series, Snapshot)

解説) u, v は, 予め宣言しておく必要がある.

使用例) ISPP User's Manual 3.3 節 2次元seriesの扱い方 参照.

参照) FFTC

ソースファイル

fftn.c

機能) データに対して非再帰型 (FIR) フィルタをかける.

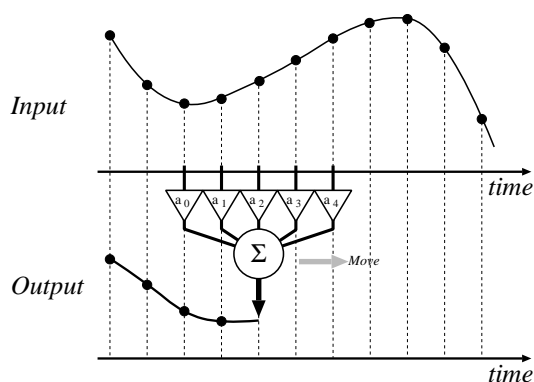
形式) $y = \text{fir}(\text{prm}, x[, \text{data}])$

パラメータ) 1. prm : パラメータ系列 (Series, Snapshot)
 2. x : 入力オブジェクト (Series, Snapshot)
 3. data : 2次元FIRフィルタをかける場合に入力データからはみ出した部分を補完する. 入力の平均を用いる場合は設定しなくてよい. (Scalar)
 4. y : 出力オブジェクト (Series)

解説) 1. 入力が2次元のときは, 2次元FIRフィルタをかける.
 2. フィルタリング・スパン (パラメータ系列の長さ) は, 奇数値でなければならない.
 3. 1次元フィルタの係数は `firmake` コマンドを用いて生成できる.
 4. 1次元FIRフィルタの処理概念図を以下に示す.

使用例) ISPP User's Manual 3.2 節 フィルタ処理, 3.3 節 2次元seriesの扱い方 参照.

参照) FIRMAKE, IIR



fir コマンドのフィルタ処理概念図

a_0, a_1, \dots, a_4 は, コマンドにおけるパラメータ系列 (添字は, 系列の順番を示している).

ソースファイル

fir.c

機能) 非再帰型 (FIR) フィルタを設計する

形式) `prm = firmake(Type,Span,Cutoff,Window[,coef])`

パラメータ) 1. Type : フィルタ特性 (1: LowPass, 2: HighPass, 3: BandPass)
2. Span : フィルタ次数 (奇数)
3. Cutoff : 遮断周波数
LowPass, HighPass では Scalar 値 (周波数 Hz)
BandPass 特性では, Series で設定する, 例えば,
Para = firmake(3,11,(100,200),3) のように設定する.
4. Window : 設計に使用する窓関数 (0: 矩形窓, 1: ハニング窓, 2: ハミング窓,
3: ブラックマン窓, 4: カイザー窓)
5. coef : カイザー窓を使用する場合は, カイザー窓の係数を与える (coef > 21).
他の窓では設定しなくてよい.
6. prm : パラメータ系列 (Series)

解説) 1. フィルタ設計には, 窓関数法を用いている.
2. 2次元フィルタは設計できない.
3. フィルタリング・スパン (パラメータ系列の長さ) は, 奇数値でなければならない.

使用例) ISPP User's Manual 3.2 節 フィルタ処理 参照.

参照) FIR, IIR

ソースファイル

firmake.c

機能) 2次元ガウス関数を生成する.

形式) `x = gauss2(size, center, r11, r12, r22, max)`

パラメータ) 1. x : 出力オブジェクト (Series)
2. size : データサイズ (インデックス)
3. center : ガウス関数の中心座標 (インデックス)
4. r11,r12,r22 : 共分散行列の要素 (Scalar)
5. max : ガウス関数の最大値 (Scalar)

ソースファイル

gauss2.c

機能) ヒルベルト変換処理を行う.

形式) `hil(x, u, v)`

パラメータ) 1. x : 入力時系列 (Series , Snapshot)
2. u : 出力時系列:実部 (Series)
3. v : 出力時系列:虚部 (Series)

解説) 出力 `u,v` は予め宣言しておく必要がある.

ソースファイル

hil.c

機能) バタワース特性の IIR 型ハイパスフィルタを設計する.

形式) `gain = hpbtw(fc, order, zr, zi, pr, pi)`

パラメータ) 1. fc : 遮断周波数 (入力) [Hz] (Scalar)
 2. order : フィルタ次数 (入力) (Scalar)
 3. zr : 零点 (実数部) 出力 (Series)
 4. zi : 零点 (虚数部) 出力 (Series)
 5. pr : 極 (実数部) 出力 (Series)
 6. pi : 極 (虚数部) 出力 (Series)
 7. gain : ゲイン (Scalar)

解説) 1. 設計値は, iircoef を使用すれば直接型 IIR フィルタの係数に変換できる.
 2. 設計可能フィルタ次数は最大 101 次である.

使用例) ISPP User's Manual 3.2 節 フィルタ処理 参照.

参照) LPBTW, BPBTW, IIRCOEF

ソースファイル

hpbtw.c

機能) 2つのオブジェクトのデータの逆ケプストラムを計算する.

形式) `icep(x, y, u, v)`

パラメータ) 1. x : 入力時系列:実部 (Series, Snapshot)
2. y : 入力時系列:虚部 (Series, Snapshot)
3. u : 出力時系列:実部 (Series)
4. v : 出力時系列:虚部 (Series)

解説) 1. y に 0 を入力した場合は, 虚部のデータに全て 0 が入力されたとして処理する.
2. 出力 u,v は予め宣言しておく必要がある.

参照) CEP

ソースファイル

icep.c

機能) データに対して再帰型 (IIR) フィルタをかける。

形式) $y = \text{iir}(\text{prm}, x)$

パラメータ) 1. prm : パラメータ系列 (Series , Snapshot)

2. x : 入力時系列 (Series , Snapshot)

3. y : 出力時系列 (Series)

解説) 1. 入力時系列は1次元でなければならない。

2. アルゴリズム

入力データを n 個の離散値 $x(i)$ (ただし, $i = 1, 2, \dots, n$) で表し, N 個の離散点からなる “重み関数” $w(j)$ (ただし, $j = 1, \dots, N$) を用いる. 出力値 $y(i)$ は次のように求める.

$$y(i) = \sum_{j=1}^N w(j)y(i-j) + x(i)$$

iir コマンドの処理概念図を以下に示す.

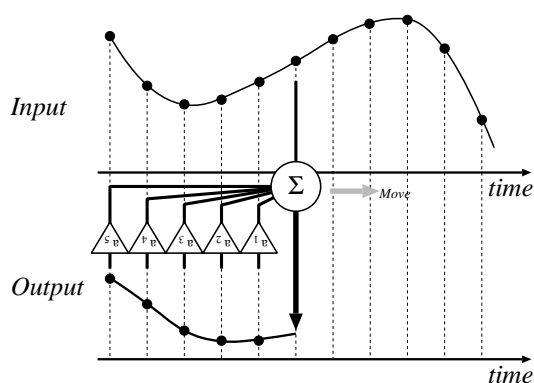
3. 通常の方法で設計される直接型の IIR フィルタによる処理を行なうには, 次のようにする. par_a, par_b はそれぞれ伝達関数 $H(z)$ の分母, 分子の各係数を fir, iir コマンドに直接入力できるように iircoef コマンドで調整したものである.

```
% temp = fir( par_b , input_signal );
```

```
% output_signal = gain * iir( par_a , temp );
```

使用例) ISPP User's Manual 3.2 節 フィルタ処理

参照) FIR, IIRCOEF, BPBTW, HPBTW, LPBTW



iir コマンドのフィルタ処理概念図

a_1, \dots, a_5 は, コマンドにおけるパラメータ系列 (添字は系列の順番を示す).

ソースファイル

iir.c

機能) 零点, および極から直接型 IIR フィルタの係数を求める.

形式) `iircoef(zr, zi, pr, pi, a, b)`

パラメータ) 1. zr : 零点の実数部 入力オブジェクト (Series, Snapshot)
2. zi : 零点の虚数部 入力オブジェクト (Series, Snapshot)
3. pr : 極の実数部 入力オブジェクト (Series, Snapshot)
4. pi : 極の虚数部 入力オブジェクト (Series, Snapshot)
5. a : 伝達関数の分母の係数の出力オブジェクト (Series)
6. b : 伝達関数の分子の係数の出力オブジェクト (Series)

解説) 1. 出力される係数は, iir, fir それぞれのコマンドにそのまま使用できるフォーマットで出力される.
2. 出力 a,b は予め宣言しておく必要がある.

使用例) ISPP User's Manual 3.2 節 フィルタ処理

参照) BPBTW, HPBTW, LPBTW, FIR, IIR

ソースファイル

iircoef.c, Complex.h, complex.c

機能) Series の内容を積算する.

形式) `n = integ(x [,y])`

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト (Series, Snapshot)
 2. y : 出力オブジェクト (Series)
 3. n : 積算値 (Scalar)

解説) 1. 出力 y には, 積算の途中経過が格納される .
 (数学の積分とは異なる . $\sin(t) \rightarrow -a \times \cos(t)$)
 2. 返回值 n は, 全要素についての合計
 3. 処理 $n = \sum_{j=1}^m x(j)$

使用例) `% x = (-2,-1,0,1,2);` # 入力データ
`% series y;` # 途中結果を格納する変数

`% integ(x,y);`
`0` # 計算結果

`% y`
`[0]:% -2 -3 -3 -2 0` # 途中経過

ソースファイル

integ.c

機能) 2次元データを読み込み2次元補間を行ない, その結果を出力する.

形式) `y = interp(x, s1, s2)`

パラメータ) 1. x : 2次元入力オブジェクト (Series, Snapshot)
2. y : 2次元出力オブジェクト (Series)
3. s1 : X軸データの補間数 (≥ 0)
4. s2 : Y軸データの補間数 (≥ 0)

解説) 1. 補間数は, 元データの2点のデータ間を, 何個のデータをもって補間するのかを指定する.
2. 入力オブジェクトは, 2次元データでなければならない.
3. X軸とは, 時間軸 (データ長が可変のデータ方向)

参照) CONT(NEWGPM)

ソースファイル

interp.c

機能) 2次元データを行列とみなし, 逆行列を求める.

形式) `y = inv(x)`

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト (Series, Snapshot)
2. y : 出力オブジェクト (Series, Snapshot)

解説) 1. 正方行列のみ計算可能
2. 3次元以上のデータは, 下位の2次元データを配列とみなし, すべての配列について逆行列を計算し, 同じインデックスサイズの Series を返す.

使用例) 3次元データの場合

```
% matrix                                     # 入力データ
[0]:[0] [0]%                                1                0
[0]:[1] [0]%                                0                1

[1]:[0] [0]%                                0                1
[1]:[1] [0]%                                1                0

[2]:[0] [0]%                                1                2
[2]:[1] [0]%                                -2               1

% inv(matrix);                               # 逆行列の計算
[0]:[0] [0]%                                1                0
[0]:[1] [0]%                                0                1

[1]:[0] [0]%                                0                1
[1]:[1] [0]%                                1                0

[2]:[0] [0]%                                0.2              -0.4
[2]:[1] [0]%                                0.4                0.2
```

ISPP User's Manual 3.4 節 行列演算 参照.

参照) DET

ソースファイル

inv.c

機能) 時系列に線形 AR モデルをあてはめ, Levinson–Durbin アルゴリズムを用いて AR 係数を求め, パワースペクトルを出力する

形式) `levin(x, pw, aic, method, odr, dpt, tola, err, coef)`

パラメータ) 1. x : 入力時系列 (Series, Snapshot)
2. pw : 出力時系列:パワースペクトル (Series)
3. aic : 出力時系列:AIC (Series)
4. method : 次数決定方式 (A or other)
A AIC_{min} で次数決定
数値 Fixed Order
5. odr : AR モデルの最大次数
6. dpt : パワースペクトルの出力データ点数
7. tola : AIC に対する許容値 (BURG コマンド参照)
8. err : 出力時系列:予測誤差 (Series)
9. coef : 出力時系列:AR 係数 (Series)

解説) 1. 入力データは “DCCUT” コマンドにより, 直流分をカットしておく
2. “POLE” 等により, 極の特性を知ることができる
3. 出力 pw,aic,err,coef は予め宣言しておく必要がある.

使用例)

$$x_k + 0.8x_{k-1} = e_k, \quad e_k \sim N(0.0, 1.0)$$

に従う信号のパワースペクトルと AR 係数を求める (odr:固定).

```
% x = argen(para,1024);           # 信号の生成.

% series pw,aic,err,coef;         # Series 変数の宣言.
% levin(x,pw,aic,1,1,128,2,err,coef); # 推定.
Order =      1      AIC =      -41.225
AR Coefficient( 1)=      0.7817198,      0.7817198

% coef
[0]:%      0.7917
```

参照) BURG, POLE

ソースファイル

levin.c

機能) バタワース特性の IIR 型ローパスフィルタを設計する.

形式) `gain = lpbtw(fc, order, zr, zi, pr, pi)`

パラメータ) 1. fc : 遮断周波数 (入力) [Hz] (Scalar)
 2. order : フィルタ次数 (入力) (Scalar)
 3. zr : 零点 (実数部) 出力 (Series)
 4. zi : 零点 (虚数部) 出力 (Series)
 5. pr : 極 (実数部) 出力 (Series)
 6. pi : 極 (虚数部) 出力 (Series)
 7. gain : ゲイン (Scalar)

解説) 1. 設計値は, iircoef を使用すれば直接型 IIR フィルタの係数に変換できる.
 2. 設計可能フィルタ次数は最大 101 次である.

使用例) ISPP User's Manual 3.2 節 フィルタ処理 参照.

参照) HPBTW, BPBTW, IIRCOEF

ソースファイル

lpbtw.c

機能) 多次元正規分布に従う乱数ベクトルを発生する.

形式) `x = mnrand(dpt, seed, mvec, vmat)`

パラメータ) 1. x : 出力オブジェクト (Series)
 2. dpt : 出力ベクトルの数
 3. seed : 乱数の初期値 (奇数)
 4. mvec : 入力オブジェクト : 平均値ベクトル (Series, Snapshot)
 5. vmat : 入力オブジェクト : 分散共分散行列 (Series, Snapshot)

解説) 1. 乱数のシードは, M 系列を用いて生成している.
 2. 分散共分散行列に対してコレスキー分解を施すことにより, 多次元乱数を生成している.
 3. 分散共分散行列は, 正定値対称行列でなければならない.

使用例) 平均 $\mu_1 = \mu_2 = 0$, 分散 $\sigma_1^2 = \sigma_2^2 = 1$, 相関係数 $\rho_{12} = 0.5$ で規定される 2 次元正規分布に従う確率変数ベクトル (y_1, y_2) を 1000 点生成する.

```
mvec = (0,0);           # 平均ベクトルの設定
vmat = (1,0.5,0.5,1);   # 分散共分散
vmat = reform(vmat,(2,2)); # 行列の設定
y = mnrand(1000,1,mvec,vmat); # 乱数生成
y1 = y[0];              # 1000 点の乱数が
y2 = y[1];              # 格納される
```

参照) NRAND, URAND

ソースファイル

mnrand.c

機能) 2つの2次元データを行列とみなして積を求める.

形式) `z = mul(x, y)`

パラメータ) 1. x, y : 入力オブジェクト (Series, Snapshot)

2. z : 出力オブジェクト (Series, Snapshot)

解説) 1. 1次元データは, 行ベクトルとみなして計算する.

2. 3次元以上のデータについての動作は, 次のようになる.

- x: 2次元以下,y: 3次元—x に y の行列をそれぞれ乗ずる.
- x: 3次元,y: 2次元以下—x の行列のそれぞれに y を乗ずる.
- x: 3次元,y: 3次元—x と y の行列が一对一に対応すればそれぞれ積を求める, それ以外はエラー.

使用例) ISPP User's Manual 3.4 節 行列演算 参照.

ソースファイル

mul.c

機能) 正規方程式 $X^T X \beta = X^T y$ を解き, パラメータの最小2乗推定量 $\hat{\beta}$ を求める.

形式) `para = nmeq(x, y)`

パラメータ) 1. para : 出力オブジェクト : パラメータベクトル (Series)
 2. x : 入力オブジェクト : 計画行列 (Series, Snapshot)
 3. y : 入力オブジェクト : 従属変数ベクトル (Series, Snapshot)

解説) 1. ハウスホルダー変換を用いて計算している.

ISPP User's Manual 3.4 節 行列演算 では行列演算コマンドを組合わせて同様の機能を実現しているが, 精度等については本コマンドの方が優れている (ハウスホルダー変換を用いているため).

使用例) あるシステムへの入力データ $x = (-2, -1, 0, 1, 2)$ と, 出力データ $y = (7.25, 3.81, 1.88, 2.33, 5.12)$ が与えられている時, これを, 以下のようなモデル,

$$y_i = \beta_1 + \beta_2 x_i + \beta_3 x_i^2 + \varepsilon_i, \quad i = 1, \dots, 5$$

により同定する.

```
% x = (-2,-1,1e-10,1,2);
% y = (7.25,3.81,1.88,2.33,5.12); # 従属変数ベクトルの設定

% series xmat[3];
% xmat[0] = x^0; # 計画行列の設定
% xmat[1] = x^1;
% xmat[2] = x^2;

% beta = nmeq(xmat,y); # パラメータ値を求める
```

パラメータの最小2乗推定量は次のようになる.

```
% beta
[0]:%      1.958      -0.574      1.06
```

ソースファイル

nmeq.c

機能) 指定されたオブジェクトの内容を正規化する.

形式) `y = norm(x , type)`

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト (Series, Snapshot)
 2. y : 出力オブジェクト (Series, Snapshot)
 3. type : 正規化方法
 1 — 最大値で正規化
 2 — 最小値で正規化
 3 — 絶対値最大で正規化
 4 — 絶対値最小で正規化
 5 — 平均0, 分散1に正規化

解説) 処理内容を以下に示す.

$$\begin{aligned} \text{type}=1 & : y_i = x_i / x_{\max} \\ \text{type}=2 & : y_i = x_i / x_{\min} \\ & z_i = |x_i| \\ \text{type}=3 & : y_i = x_i / z_{\max} \\ \text{type}=4 & : y_i = x_i / z_{\min} \\ \text{type}=5 & : y_i = (x_i - x_{\text{mean}}) / \sqrt{1/n \sum_j (x_j - x_{\text{mean}})^2} \end{aligned}$$

使用例) データの最大値を1, 最小値を0に正規化する場合の記述例

```
% y = norm(x-min(x), 1);
```

ソースファイル

norm.c

機能) 正規乱数データを生成する.

形式) `x = nrand(dpt, init, mean, variance)`

パラメータ) 1. x : 出力時系列 (Series)
2. dpt : 出力データ点数
3. init : 乱数の初期値 (奇数)
4. mean : 平均値
5. variance : 分散

解説) 1. 乱数のシードは, M系列を用いて生成している

使用例) 平均 0.5 分散 1.0 の正規分布に従う乱数を 1024 点生成する.

```
% x = nrand(1024, 1, 0.5, 1.0);
```

ISPP User's Manual 3.1 節 フーリエ変換 参照.

参照) MNRAND, URAND

ソースファイル

nrand.c

機能) 2つのオブジェクトの内容により位相を求める.

形式) `ph = phase(x, y, d, u)`

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト:実部 (Series, Snapshot)
 2. y : 入力オブジェクト:虚部 (Series, Snapshot)
 3. ph : 出力オブジェクト (Series)
 4. d : 出力データ形式 (D or O)
 D degree
 O radian
 5. u : 位相戻し操作フラグ (U or O)
 U 位相戻しする
 O 位相戻ししない

解説) 1. 連続するデータが π 以上変化したとき位相戻し操作が行われる
 2. 実部および虚部がともに 0 となるデータを含む場合には, 位相戻しが正常に動作しない場合がある.

使用例) ISPP User's Manual 3.1 節 フーリエ変換 参照.

参照) FFTC, POWER, SPCF

ソースファイル

phase.c

機能) BURG, LEVIN コマンドで求められた AR 係数から極の位置を求める.

形式) `pole(ar, xr, xi)`

パラメータ) 1. ar : AR 係数を格納してある時系列 (Series, Snapshot)
 2. xr : 極の実数部の値を格納する時系列 (Series, Snapshot)
 3. xi : 極の虚数部の値を格納する時系列 (Series, Snapshot)

使用例) 線形 AR モデル

$$x_k + 0.8x_{k-1} = e_k$$

の極の位置を求める.

```
% para                                # AR 係数
[0]:%    0.8
% series xr,xi;                        # 出力を格納する変数の宣言

% pole(para,xr,xi);
AR[ 0]=                                0.8

I= 0  X=          -0.8  Y=              0
I= 1  X=    3.3952e-313  Y=    3.3952e-313
I= 2  X=              0  Y=              0.8
I= 3  X=    3.3952e-313  Y=    3.3952e-313

% xr                                # 実部
[0]:%          -0.8
% xi                                # 虚部
[0]:%              0
```

参照) BURG, LEVIN

ソースファイル

pole.c

機能) 2つのオブジェクトの内容を2乗して加算する.

形式) `z = power(x, y)`

パラメータ) 1. x, y : 入力オブジェクト (Series, Snapshot)
2. z : 出力オブジェクト (Series)

解説) 処理 : $z_i = x_i^2 + y_i^2$

使用例) ISPP User's Manual 3.1 節 フーリエ変換 参照.

参照) FFTC, PHASE, SPCF

ソースファイル

power.c

機能) データの内容から, 度数, 分散, 平均値を求め, その正規分布を算出する.

形式) `rank(x, u, v, w, xmin, xmax, n)`

パラメータ) 1. x : 入力時系列 (Series , Snapshot)
 2. u : 出力時系列:度数・ Y 軸 (Series, Snapshot)
 3. v : 出力時系列:度数・ X 軸 (Series, Snapshot)
 4. w : 出力時系列:正規分布・ Y 軸 (Series, Snapshot)
 5. xmin : 階級の最小値 (Scalar)
 6. xmax : 階級の最大値 (Scalar)
 7. n : 階級の個数

使用例) ISPP User's Manual 3.5 節 データの統計処理 参照.

ソースファイル

rank.c

機能) データ上の任意の点を指定したレベルと一致するように全体をシフトする。

形式) `y = shift(x, pos, level)`

パラメータ)

1. x : 入力オブジェクト (Series, Snapshot)
2. y : 出力オブジェクト (Series, Snapshot)
3. pos : データインデックス
4. level : 指定レベル (Scalar)

ソースファイル

shift.c

機能) 入力データのパワースペクトル, 位相を計算する.

形式) `spcf(x, amp, phs)`

パラメータ) 1. x : 入力時系列 (Series, Snapshot)
 2. amp : 出力時系列:パワースペクトル (Series, Snapshot)
 3. phs : 出力時系列:位相 (Series, Snapshot)

解説) 1. N 点のデータを入力したときの出力データ

データ点数 : $N/2 + 1$

パワースペクトル : $amp_i = \frac{2}{N \cdot sf} \{X_{\text{real}}^2(i) + X_{\text{imag}}^2(i)\}$

Nyquist 周波数までの片側 PSD を出力するので 2 倍してパワーが同じになるようにしてある.

位相 : 単位は degree である.

sf は, サンプリング周波数.

2. 出力 amp, phs は予め宣言しておく必要がある.

離散データからの FFT によるパワースペクトル推定について簡単に触れておく.
 入力 $x_t, t = 0, 1, \dots, N - 1$ のパワースペクトルの計算には一般的に次式が用いられている [1].

$$P(f) = \frac{1}{T} \|X(f)\|^2 = \frac{sf}{N} \|X(f)\|^2$$

$$X(f) = \frac{1}{sf} \sum_{t=0}^{N-1} x_t e^{-j \cdot 2\pi f t / sf}$$

ただし本コマンドは FFTC コマンドと同一のモジュールを使用しているため以下のようなになる.

$$P(f) = \frac{sf}{N} \|X(f)\|^2$$

$$= \frac{1}{N \cdot sf} \{X_{\text{real}}^2(f) + X_{\text{imag}}^2(f)\}$$

$$X(f) \cdot sf = X_{\text{real}}(f) - j X_{\text{imag}}(f)$$

上式以外の定義を用いる文献 [2] があるので注意が必要である.

使用例) ISPP User's Manual 3.1 節 フーリエ変換 参照.

参照) FFTC, PHASE, POWER

[1] 中溝 高好: “信号解析とシステム同定”, コロナ社, 1988

[2] 越川 常治: “信号解析入門”, 近代科学社, 1992

ソースファイル

spectr.c

機能) 自然3次スプライン補間により, 1次元系列の入出力データ対 x, y を補間した系列 xip, yip を求める .

形式 1) `yip = spline (x, y, xip)`

形式 2) `yip = spline (x, y, dpt [, xip2])`

パラメータ) 1. x : 入力時系列 (Series, Snapshot)
2. y : 出力系列 (1次元 Series)
3. dpt : 補間後のデータ点数 (>0), サンプリング周波数からデータ点数, 補間後の入力系列を求める ($=0$) .
4. xip : 補間後の入力系列 (1次元 Series)
5. yip : 補間後の出力系列 (1次元 Series)
6. $xip2$: 動生成された補間後の入力系列 (1次元 Series)
解説) 1. x, y は同じデータ点数でなければならない .
2. x および xip は, とともに $x_i < x_{i+1}$ の関係を満たしていなければならない .

形式 1 について: • xip の系列と対になる yip が求められる .
• xip の値の範囲は x の値の範囲を超えてはならない .

形式 2 について: • $dpt = 0$ の場合は, サンプリング周波数をもとに, 以下の定義により, xip が自動生成される .

$$xip_0 = x_0, xip_i = x_0 + step \times i, \dots, xip_{dpt-1} = x_{n-1}$$

ここで $step = 1.0/sf, dpt = (x_{n-1} - x_0) \times sf + 1$,
ただし sf はサンプリング周波数, n は x のデータ点数 .

• $dpt > 0$ の場合は, 上式の $step$ を次式として xip が生成される .

$$dpt > 1 \text{ のとき } \quad step = (x_{n-1} - x_0) / (dpt - 1)$$

$$dpt = 1 \text{ のとき } \quad step \text{ は } 0$$

• 第4引数 $xip2$ には, 自動生成された補間後の入力系列 xip が格納される .

参照) AKIMA

ソースファイル

spline.c

機能) 2次元データを行列とみなし転置行列を求める.

形式) `y = trans(x)`

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト (Series, Snapshot)
2. y : 出力オブジェクト (Series, Snapshot)

解説) 1. 1次元データは, 行ベクトルとみなして処理する.
2. 3次元以上のデータについては, 複数の行列とみなし, 下位の2次元について
を行列として処理する.

使用例) `% x = (1,2,3);` `# 入力データ (行ベクトル)`

`% trans(x);` `# 転置 (列ベクトル)`

`[0]:[0]% 1`

`[1]:[0]% 2`

`[2]:[0]% 3`

ISPP User's Manual 3.4 節 行列演算 参照.

ソースファイル

trans.c

機能) 一様乱数データを生成する.

形式) `x = urand(dpt, init, lower, upper)`

パラメータ) 1. x : 出力時系列 (Series, Snapshot)
 2. dpt : 出力データポイント
 3. init : 初期値 (奇数)
 4. lower : データの最小値 (Scalar)
 5. upper : データの最大値 (Scalar)

解説) 1. 乱数のシードは, M 系列を用いて生成している.

使用例) 区間 $[0, 1]$ の一様乱数を 1024 点生成する.

```
% x = urand(1024, 1, 0, 1);
```

参照) MNRAND, NRAND

ソースファイル

urand.c

機能) データに対して, ウィンドウ処理 (ハニング, ハミング) を施す.

形式) `y = window(x, type, flag)`

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト (Series, Snapshot)

2. y : 出力オブジェクト (Series, Snapshot)

3. type : ウィンドウの種類 (1~4)

1 — ハミングウィンドウ

2 — ハニングウィンドウ

3 — ブラックマン

4 — トライアングル

4. flag : データ補正フラグ (0 or 1)

0 — 補正しない

1 — 補正する

解説) 1. データ補正を行なうとウィンドウを処理前後の積分値が等しくなる.

2. 入力が2次元データの場合には, 2次元ウィンドウ処理を行なう.

使用例) ISPP User's Manual 3.1 節 フーリエ変換 参照.

ソースファイル

window.c

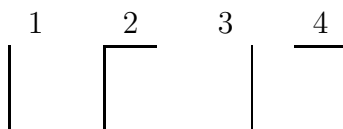
グラフィックシステム

GPM

機能) “cont”, “graph”, “map” コマンドで表示したグラフの X 軸, Y 軸を Linear もしくは Log 表示する.

形式) `axis(tbuf, typ, flg1, flg2 , size, grid, form, xscl, yscl, index)`

- パラメータ) 1. tbuf : タイトルバッファ番号 (1, 2, 3)
 グラフィックコマンドでは, 軸のタイトルを登録するために, x, y, z 軸 1 組で, 3 本のタイトルバッファを持っている. その中の何番のタイトルを表示するか
 の指定を行う. なお, 本コマンドでは z 軸の値は使用しない.
2. typ : 軸の表示形式 (1, 2, 3 or 4)

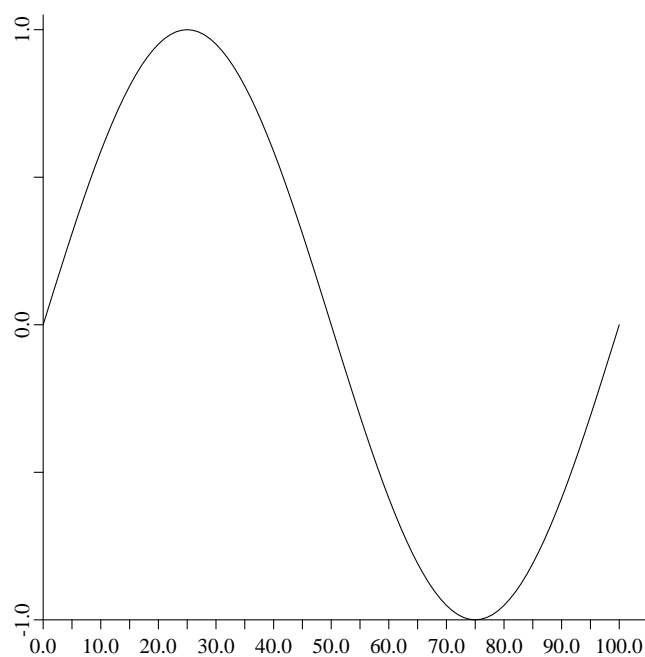


3. flg1 : 表示する軸の指定 (“X”, “Y” or “XY”)
 “X” X 軸のみ表示
 “Y” Y 軸のみ表示
 “XY” XY 両軸を表示
4. flg2 : 表示するスケールの指定 (“X”, “Y” or “XY”)
 “X” X 軸のスケールのみ表示
 “Y” Y 軸のスケールのみ表示
 “XY” XY 両軸のスケールを表示
5. size : 表示するスケール, タイトルの文字サイズ [mm]
6. grid : グリッド表示の指定
 0 グリッドなし
 1 X 軸のみを表示
 2 Y 軸のみを表示
 3 XY 両軸を表示
7. form : スケール表示の型指定
 0 X 軸…実数, Y 軸…実数
 1 X 軸…整数, Y 軸…実数
 2 X 軸…実数, Y 軸…整数

- 3 X軸…整数, Y軸…整数
- 8. xscl : X軸スケール表示間隔
- 9. yscl : Y軸スケール表示間隔
- 10. index : linear スケール値の指数表示指定 (0 or 1)
 - 0 必要ならば指数表示をする (デフォルト)
 - 1 スケール値に関係なく指数表示を行なわない

使用例)

```
t = (0~100)/100*2*PI  
data = sin(t)  
wopen(1,"A4",0,0)  
axis(1,1,"XY","XY",3.5,0,0,10,1,0)  
と入力すると,
```



となる.

ソースファイル

axis.c

機能) アクティブウィンドウを切り替える.

形式) `chwin(wnum)`

パラメータ) 1. `wnum` : 切り替えたいウィンドウ番号

ソースファイル

`chwin.c`

機能) グラフ, 軸, フレームの色を指定する.

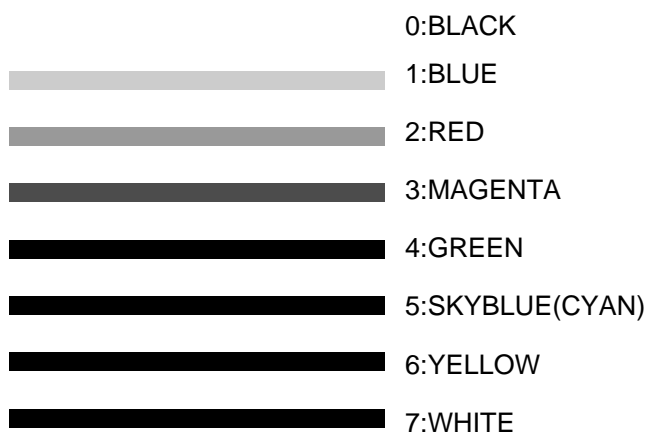
形式) `color(pen1, pen2)`

パラメータ) 1. pen1 : グラフの色 ($1 \leq \text{pen1} \leq 10$, 整数 or カラー名)
2. pen2 : 軸, フレームの色 ($1 \leq \text{pen2} \leq 10$, 整数 or カラー名)

解説) 1. 色指定 (ディスプレイ)
色指定は, 以下の整数値以外にカラー名を指定してもよい. (小文字でも可)
カラー名: "BLACK", "BLUE", "RED", "MAGENTA", "GREEN", "SKY-BLUE" ("CYAN"), "YELLOW", "WHITE", "GLAY1", "GLAY2", "GLAY3"

0 黒	1 青
2 赤	3 紫
4 緑	5 水色
6 黄色	7 白
8 グレー1	9 グレー2
10 グレー3	

使用例) プリンタに出力したときは次のようになる. ディスプレイと紙では白黒が反転するの注意. (GRAY1 から GRAY3 のプリンタへの出力は, それぞれ 3, 2, 1 のカラー番号を指定したときと同じ濃度で出力される)



ソースファイル

newpen.c

機能) 入力された2次元データの等高線を表示する.

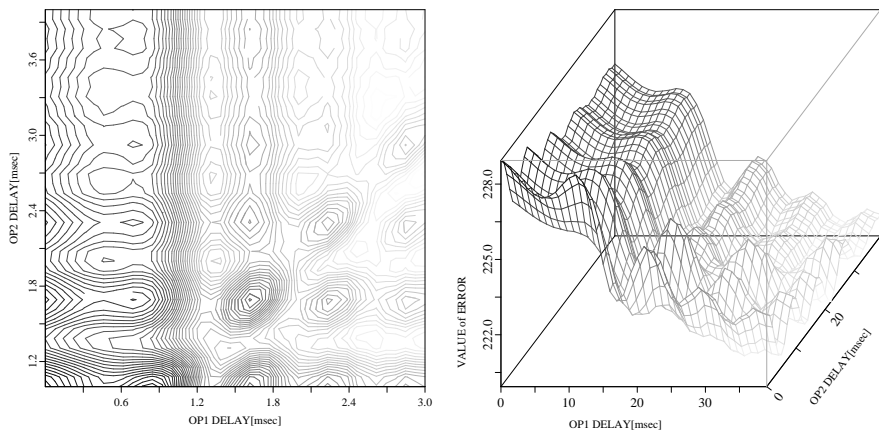
形式) `cont(x, step, dirc, view, mode)`

パラメータ) 1. x : 入力オブジェクト (Series, Snapshot)
2. step : 等高線の表示間隔
3. dirc : 表示方向
 “X” オブジェクトの上位次元がX軸方向になる
 “Y” オブジェクトの下位次元がY軸方向になる
4. view : 表示データの原点の指定 (1 : 左下が原点, -1 : 左上が原点)
5. mode : 表示モードの指定 (0 : モノクロ, 1 : カラー)

解説) 1. 表示する等高線の最大, 最小値の設定は, “scale” コマンドで設定する.
2. 表示を行なう際, 補間を行なわない. 等高線を滑らかに表示するためにはinterpコマンドを用いる必要がある.

参照) INTERP

使用例)



ソースファイル

cont.c

機能) “cont”, “graph”, “map” コマンドで表示したグラフに対し, 指定したレベルのラインを表示する

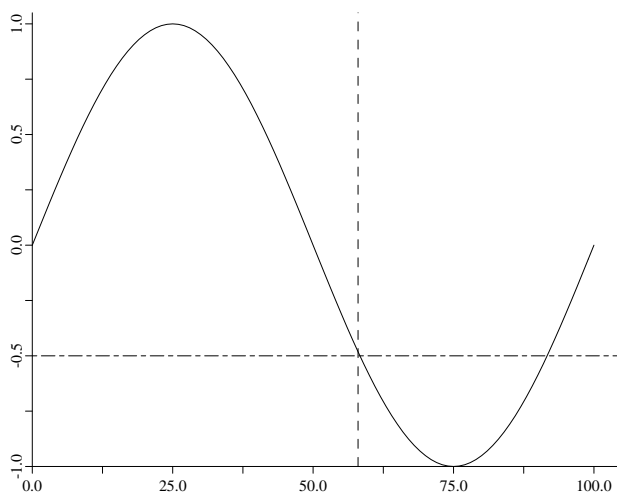
形式) `draw(axs, val)`

パラメータ) 1. axs : 軸の指定 (“X” or “Y”)
2. val : ライン表示する値 (Scalar)

解説) 1. 第1引数が “X” ならば, $x = \text{val}$ となるような, “Y” ならば, $y = \text{val}$ となるような直線を作成する.
2. 色の指定は “color” コマンドの第2パラメータで指定する
3. graph を表示しなくても, scale で設定したレベルに基づいてラインを引くこともできる.

使用例)

```
graph(data,"T",0,0,0,0,0)
ltype( 2, 2 )      # 長鎖線
draw( "X", 58 )    # X 軸に補助線を引く
ltype( 3, 3 )      # 一点鎖線
draw( "Y", -0.5 )  # Y 軸に補助線を引く
```



ソースファイル

draw1.c

機能) エラーバー付きのグラフを表示する.

形式) `egraph(y, x, axs, lne, step, sym1, sym2)`

- パラメータ)
1. `y` : Y軸方向のデータ (Numeric, “T” or “F”)

object	入力オブジェクト (Series, Snapshot)
“T”	時間軸
“F”	周波数軸
“D”	データ点数
 2. `x` : X軸方向のデータ (Numeric, “T” or “F”)

object	入力オブジェクト (Series, Snapshot)
“T”	時間軸
“F”	周波数軸
“D”	データ点数
 3. `axs` :XY 軸の形式 (0, 1, 2 or 3)

	X 軸	Y 軸
0	LINEAR	LINEAR
1	LOG	LINEAR
2	LINEAR	LOG
3	LOG	LOG
 4. `lne` : グラフ描画の形式

0	エラーバー付きのグラフを引く
1	センターシンボルおよびエラーバーを表示
2	エラーバーおよびグラフ, センターシンボルを表示
3	棒グラフを描く
4	<code>lne = 0</code> および <code>lne = 3</code> で表示する
5	零レベルとグラフで囲まれた領域を塗りつぶす
6	エラーバーのみ描く
 5. `step` : 表示間隔 ($\text{step} \geq 0$, 整数型)
(STEP-1) 点ごとのデータを対象に処理を行う
 6. `sym1` : センターシンボルの指定 ($0 \leq \text{sym1} \leq 16$, 整数型) シンボルの種類については, `graph` コマンド参照
 7. `sym2` : センターシンボルの大きさ [mm] ($\text{sym2} \geq 0$, 実数型)

解説)

1. データ形式は, index が (n,2) または, (n,3) である必要がある. 例えば, y が表示するデータである場合, 前者の場合には, y[0] がグラフ, y[0]±y[1] がエラーバーとして表示される. 後者の場合, y[0] をグラフ, y[1], y[2] をエラーバーの端点として表示する.

2. 時間軸表示

$$buff(i) = \frac{1000.0 \times float(i-1)}{sam}$$

3. 周波数軸表示

$$\begin{aligned} \delta &= \frac{sam}{float(n-1) \times 2.0} \\ buff(i) &= \delta \times float(i-1) \end{aligned}$$

4. センターシンボルの大きさ

大きさは [mm] で入力する. 但し, 零を入力したときは 0.5[mm] に自動設定される

ソースファイル

egraph.c graph_sub.c graph_sub.h

機能) グラフィック表示倍率を指定する.

形式) factor(x)

パラメータ) 1. x : 表示倍率 (x>0)

注意) デフォルト値は1.0.

ソースファイル

factor.c

機能) グラフィック端末の文字種類を指定する.

形式) `font(type)`

パラメータ) 1. type : 文字種類番号 (文字種類と番号の対応は以下のようになっている)

	roman	italic	bold	bold-italic
times	FONT 1	<i>FONT 2</i>	FONT 3	<i>FONT 4</i>
helvetica	FONT 5	<i>FONT 6</i>	FONT 7	<i>FONT 8</i>
courier	FONT 9	<i>FONT 10</i>	FONT 11	<i>FONT 12</i>

ソースファイル

font.c

機能) グラフの枠を描く.

形式) `frame()`

パラメータ) なし

解説) 1. `origin, size` などで指定されたパラメータに従って, グラフの枠を描く.

ソースファイル

`frame.c`

機能) グラフィックパラメータを初期化する.

形式) `ginit()`

パラメータ) なし

解説) 1. 初期設定

カラー (グラフ) 白

カラー (軸, フレーム) 白

スケール設定 自動設定

スケールファクター 1.0

原点 (X, Y) (20.0, 20.0)

サイズ (X, Y) (100.0, 100.0)

ソースファイル

`ginit.c`

機能) GPM ファイル (GPMDVIFILE) をポストスクリプトファイルに変換する

形式) `gpm2ps [-rv][-cps] [dvifilename]`

`gpm2eps [-rv][-cps] [dvifilename]`

- パラメータ)
1. -rv : map, gsolm, cont の濃淡レベルを黒:低-白:高とする。(無指定時の濃淡レベルは, 白:低-黒:高)
 2. -cps : カラー PS を出力する。(無指定時は, モノクロ出力)
 3. dvifilename : GPM ファイル名 (省略時は, GPMDVIFILE1 が設定される)
- 解説)
1. ポストスクリプト出力は, 標準出力に書き出されるので, リダイレクトによりファイルに格納するか, パイプによりプリンタに出力することができる。
 2. 本コマンドで作成したファイルは, ps2epsi コマンドを使用することにより eps ファイルに変換できる (ps2epsi は ghostscript に同梱されるツールである)。
 3. gpm2eps コマンドは, gpm2ps および ps2epsi を実行するものである。直接 eps ファイルを作成できるので, TeX などに取り込む目的でファイルを作成する場合には, gpm2eps を用いるとよい。
 4. map コマンドのカラー PS については, 疑似カラーのみ対応で, グレイスケールには対応していない。

ソースファイル

gpm2ps.c gpm2eps.sh

機能) データをグラフ表示する.

形式) `graph(y, x, axs, lne, step, sym1, sym2)`

- パラメータ)
1. `y` : Y 軸方向のデータ (Numeric, “T” or “F”)

object	入力オブジェクト (Series, Snapshot)
“T”	時間軸
“F”	周波数軸
“D”	データ点数
 2. `x` : X 軸方向のデータ (Numeric, “T” or “F”)

object	入力オブジェクト (Series, Snapshot)
“T”	時間軸
“F”	周波数軸
“D”	データ点数
 3. `axs` :XY 軸の形式 (0, 1, 2 or 3)

	X 軸	Y 軸
0	LINEAR	LINEAR
1	LOG	LINEAR
2	LINEAR	LOG
3	LOG	LOG
 4. `lne` : グラフ描画の形式

0	線のみを引く
1	センターシンボルのみを表示
2	線とセンターシンボルを表示
3	棒グラフを描く
4	<code>lne = 0</code> および <code>lne = 3</code> で表示する
5	零レベルとグラフで囲まれた領域を塗りつぶす
 5. `step` : 表示間隔 (`step ≥ 0`, 整数型)
(STEP-1) 点ごとのデータを対象に処理を行う
 6. `sym1` : センターシンボルの指定 ($0 \leq \text{sym1} \leq 16$, 整数型)

Symbol0	Symbol1
Symbol2	Symbol3 +
Symbol4 ×	Symbol5
Symbol6	Symbol7

Symbol8	Symbol9
Symbol10	Symbol11
Symbol12	Symbol13
Symbol14	Symbol15
Symbol16	

12 から 16 までは白抜きである.

7. sym2 : センターシンボルの大きさ [mm](sym2≥0, 実数型)

解説)

1. 2次元データの場合には, 上位次元方向を時系列の方向と考え, 下位次元の要素分の本数のグラフを作画する.

2. 時間軸表示

$$buff(i) = \frac{1000.0 \times float(i - 1)}{sam}$$

3. 周波数軸表示

$$delta = \frac{sam}{float(n - 1) \times 2.0}$$

$$buff(i) = delta \times float(i - 1)$$

4. センターシンボルの大きさ

大きさは [mm] で入力する. 但し, 零を入力したときは 0.5[mm] に自動設定される

ソースファイル

Graph.c graph_sub.c graph_sub.h

機能) 直交座標系で定義される二変数関数 $Z = f(X, Y)$ が矩形領域格子点上で与えられたとき, すなわち

$$Z_{i,j} = f(X_i, Y_j) \quad 0 \leq i \leq mx, 0 \leq j \leq my$$

が与えられたとき, 立体図を表示する.

形式)

<code>gsolm(x , rh1, rh2, f1, f2, f3, f4, col, div1, div2, dirc, view, mode [, size])</code>

- パラメータ)
1. x : 入力オブジェクト (Series, Snapshot)
 2. rh1, rh2 : 表示形式 ($-1.0 < \text{rh1}, \text{rh2} < 1.0$)
(この値によって表示される図の形状が変わる)
 3. f1 : 作画条件 1 (0 or 1)
 - 0 隠線消去する
 - 1 隠線消去しない
 4. f2 : 作画条件 2 (0, 1 or 2)
 - 0 X 方向, Y 方向ともに格子線を引く
 - 1 X 方向のみ引く
 - 2 Y 方向のみ引く
 5. f3 : 作画条件 3 (0, 1 or 2)
 - 0 視点に近いへりを上側と下側ともに表示する
 - 1 上側のみ表示する
 - 2 下側のみ表示する
 6. f4 : 作画条件 4 (0~ 7)
 - 0 図に座標軸と枠をつけない
 - 1~ 7 指定された色で, 3次元の座標軸を表示する
 7. col : 零平面表示形式 (0~ 7)
 - 0 零平面を表示しない
 - 1~ 7 指定された色で零平面を表示する
 8. div1 : x 軸方向表示ステップ (≥ 1 , 整数型)
 9. div2 : y 軸方向表示ステップ (≥ 1 , 整数型)
 10. dirc : 表示方向

“X” オブジェクトの上位次元がX軸方向になる

“Y” オブジェクトの下位次元がY軸方向になる

11. view : 表示データの原点の指定 (1 : 左下が原点, -1 : 左上が原点)

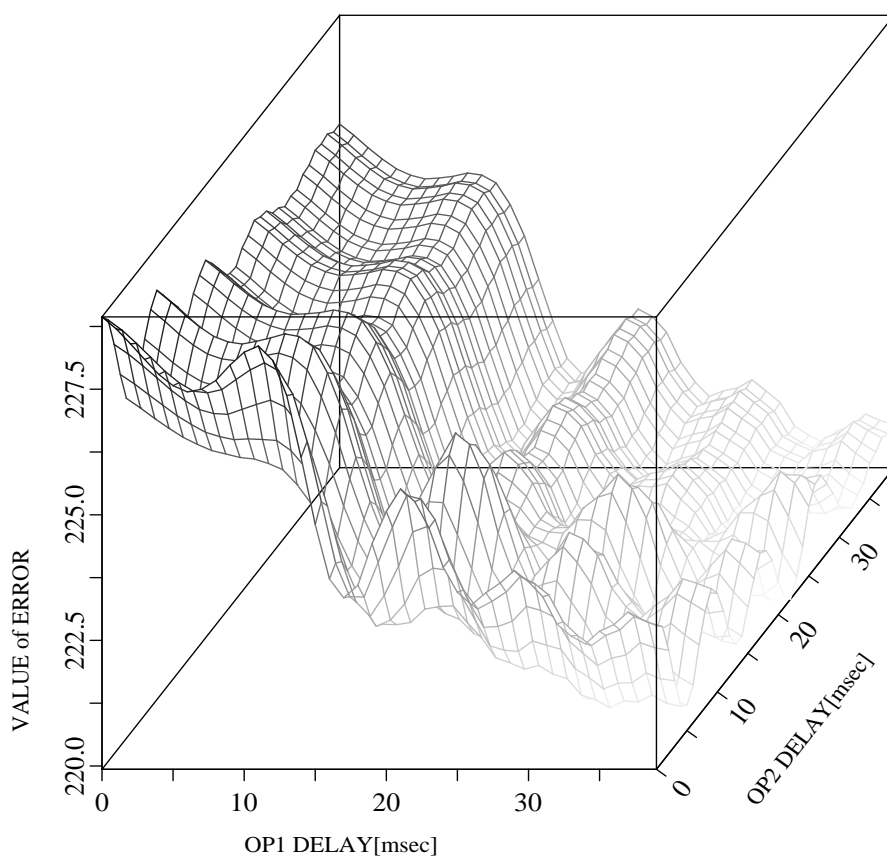
12. mode : 表示モードの指定 (0 : モノクロ, 1 : カラー)

13. size : 座標軸につけるタイトルなどの文字の大きさ (> 0mm)

解説)

1. 表示するデータの最大, 最小値は, “scale” コマンドのz軸の値の設定により行なう
2. $Z_{i,j} \leq Z_{min}$ なら $Z_{i,j} = Z_{min}$ とし, $Z_{max} \geq Z_{i,j}$ なら $Z_{i,j} = Z_{max}$ とみなして表示する.

使用例)



ソースファイル

gsolm.c

機能) グラフィックパラメータの現在値を表示する.

形式) gstat()

パラメータ) なし

実行例) [] SATELLITE[] ~Demo/SIGMA:[271]% gstat()

```
-----
GPM COMMON PARAMETERS
Current Window = No. 1
-----

Paper Size: A4, Orientation: 1 (Landscape)
DVIFILEPATH = "/home/assie/SATELLITE/ComRef/Demo/SIGMA/GPMDVIFILE1"
-----

Factor      : 1.0000
Origin      : (15.00 mm, 15.00 mm)
Size        : (100.00 mm, 100.00 mm)
Font Type   : 1 (Times Roman)
Frame Line: Width 0, Type 0, Color 7
Graph Line: Width 0, Type 0, Color 5
Scale type: X=0, Y=0, Z=0 (0:Normal 1:Log)
Scale mode: X=1, Y=1, Z=0 (0:Auto 1:Fixed 2:Default)
Scale X = min:0, max:3
Scale Y = min:1, max:4
Scale Z = min:219.934, max:228.94
TITLE 1 :
  X: "OP1 DELAY[msec]"
  Y: "OP2 DELAY[msec]"
  Z: ""
TITLE 2 :
  X: ""
  Y: ""
  Z: ""
TITLE 3 :
  X: ""
  Y: ""
  Z: ""
-----
```

ソースファイル

gstat.c

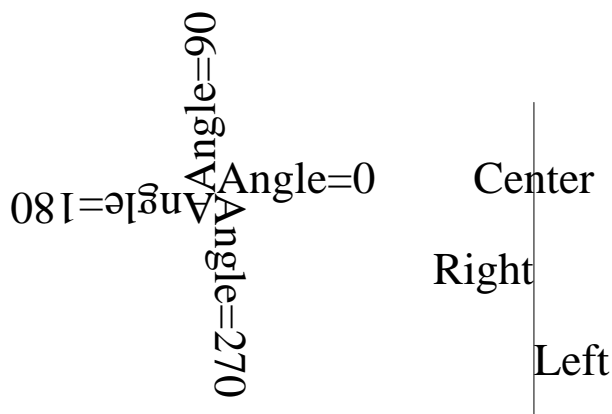
機能) グラフィック画面に文字列を書く.

形式) `label(ctyp, xorg, yorg, high, th [, str [, mode]])`

- パラメータ)
1. ctyp : 設定形式
 “I” インデックス入力によって座標を設定
 “F” インデックス入力によって座標を設定し, 文字列をファイルから読み込む
 2. xorg, yorg : 書き始める座標 [mm](相対座標)
 3. high : 書く文字のサイズ [mm]
 4. th : 書く文字の角度 (0, 90, 180, 270)[deg]
 5. str :
 ctyp=“I” 文字列 (“” で囲む, 30 文字以内)(省略可能)
 ctyp=“F” ファイル名
 6. mode : 表示モード (0 : Left, 1 : Right, 2 : Center) 指定した座標を, 文字列の左端, 右端, 中央として表示する.

- 解説)
1. 処理
 ctyp = “I” の時 : 文字列を省略すると
 >
 が表示されて入力待ちになるので, 表示したい文字列を入力する. なお, この入力方法は1度の入力で80文字まで表示することができる.

使用例)



ソースファイル

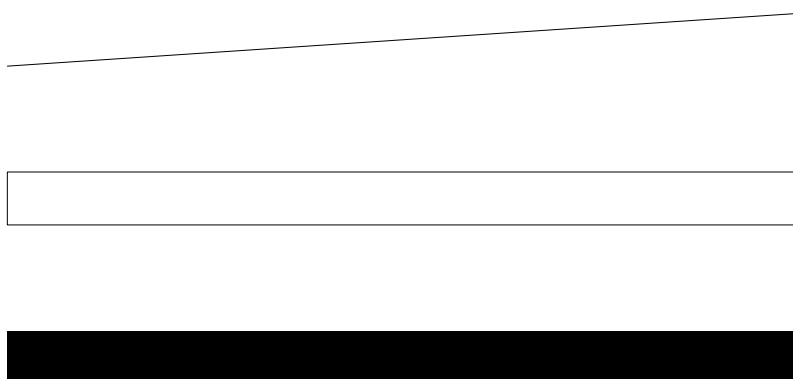
label.c

機能) グラフィック画面にラインをひく.

形式) `line(xorg, yorg, xend, yend, mode)`

パラメータ) 1. xorg, yorg : 始点座標 [mm](origin コマンドで設定した座標からの相対座標)
2. xend, yend : 終点座標 [mm](origin コマンドで設定した座標からの相対座標)
3. mode : “L”(直線), “B”(矩形), “BF”(矩形内を塗りつぶす)

使用例)



ソースファイル

Line.c

機能) 図形を出力する場合の線種を指定する

形式) `ltype(ilt1, ilt2)`

パラメータ)

1. ilt1 : グラフの線種 ($1 \leq \text{ilt1} \leq 8$)
2. ilt2 : 座標軸, フレームの線種

	1: 実線
	2: 長鎖線
	3: 一点鎖線
	4: 二点鎖線
	5: 破線
	6: 点線 1
	7: 点線 2
	8: 点線 3

ソースファイル

`ltype.c`

機能) グラフや座標軸の線幅を指定する.

形式) `lwidth(ilt1, ilt2)`

パラメータ) 1. ilt1 : グラフ線幅 ($1 \leq \text{ilt1} \leq 4$)
 2. ilt2 : 座標軸, フレームの線幅 ($1 \leq \text{ilt2} \leq 4$)

1: _____

2: _____

3: _____

4: _____

ソースファイル

`lwidth.c`

機能) 2次元データのカラーマップ表示を行う。

形式) `map(x, dirc, style, psize, view [, time, start, end, step])`

パラメータ)

1. x : 入力オブジェクト 2次元または3次元 (Series, Snapshot)
2. dirc : 表示方向 (“X” or “Y”)
 - “X” データの上位次元方向を X 軸とする
 - “Y” データの下位次元方向を X 軸とする
3. style : 表示形式 (0 ~ 7, 整数)
 - 0 パターンの色の変化
 - 1 パターンのサイズが変化 (パターンの色は COLOR コマンドで設定する.
データ > 0 : 第1パラメータ, データ < 0 : 第2パラメータ)
 - 2 パターンの色とサイズが変化
 - 3 データが min と max の範囲に正規化され, パターンのサイズが変化 (fill)
 - 4 style=3 において, パターンを open で表示
 - 5 style=3 において, パターンの色の変化
 - 6 パターンサイズが変化し, データ > 0 : open, データ < 0 : fill
 - 7 パターンサイズが変化し, データ > 0 : fill, データ < 0 : open
 - 8-14 パターンの色が, 8:青, 9:赤, 10:マゼンタ, 11:緑, 12:シアン, 13:黄色, 14:白の強弱で変化する.
4. psize : パターンサイズ (0 or 1)
 - 0 MAP 全体を SIZE で指定された大きさで表示 (デフォルト)
 - 1 各パターンを正方形で表示
5. view : 表示データの原点の指定 (1 : 左下が原点, -1 : 左上が原点)
6. time : 描画する間隔 msec 単位
7. start : 表示開始点
8. end : 表示終了点 (0 のときはデータの最後まで表示する)
9. step : 表示データのステップ (1 以上, 0 のときは 1 と同じ)

解説)

1. 表示データの範囲
 - “scale” コマンドの z 軸の設定にしたがって, 表示データの最大, 最小値を設定する.
2. PostScript プリンタへの出力

style=0, 2, 5, 8-14 では, 表示データが gray スケールの濃淡レベルに変換される (データの大 小 に対して, 黒 白に変化).
その他の style では, color コマンドの出力と同様.

3. time, start, end, step は, データが 3 次元の場合のみ有効である.

実行例) 以下のデータに対する PostScript プリンタへの出力結果を示す.

color(4,2); lwidth(2,1); scale("N","A","N","A","N","F",-3,5); を指定

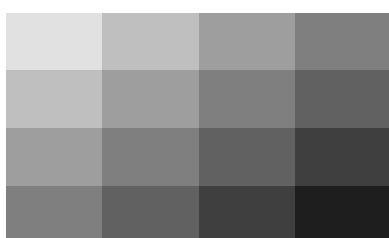
dat : [0] = (-2, -1, 0, 1)

dat : [1] = (-1, 0, 1, 2)

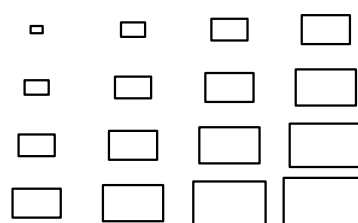
dat : [2] = (0, 1, 2, 3)

dat : [3] = (1, 2, 3, 4)

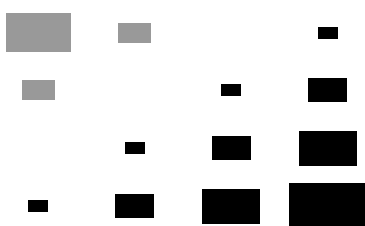
map(dat,"Y",0,0,-1)



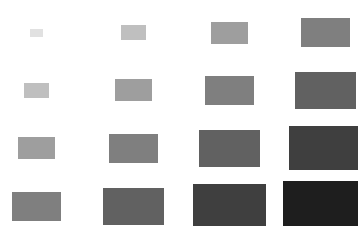
map(dat,"Y",4,0,-1)



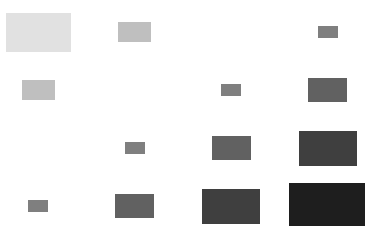
map(dat,"Y",1,0,-1)



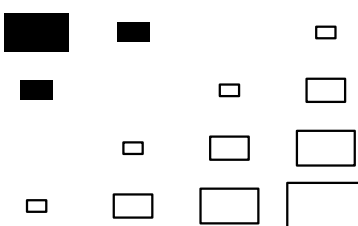
map(dat,"Y",5,0,-1)



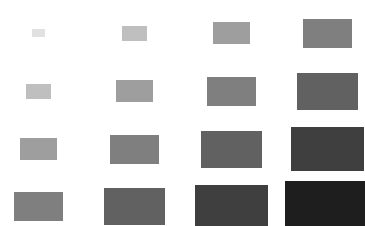
map(dat,"Y",2,0,-1)



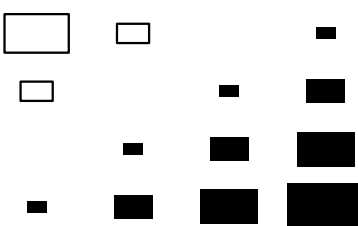
map(dat,"Y",6,0,-1)



map(dat,"Y",3,0,-1)



map(dat,"Y",7,0,-1)



ソースファイル

map.c

機能) プリンタの改ページを行う.

形式) `newpage()`

パラメータ) なし

解説) ポストスクリプトファイルに複数のページを出力できる

ソースファイル

roll.c

機能) グラフィック相対座標の原点を指定する.

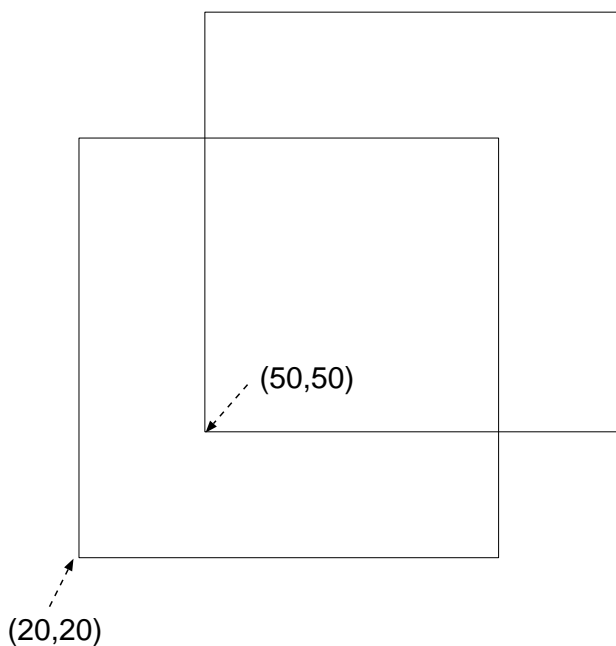
形式) `origin(xorg, yorg)`

パラメータ) 1. xorg : X 軸の原点 [mm]($xorg \geq 0.0$, 実数型)
2. yorg : Y 軸の原点 [mm]($yorg \geq 0.0$, 実数型)

解説) 1. 原点の指定は, 絶対座標 [mm] で行う

使用例)

```
origin(20,20); frame();
origin(50,50); frame();
で,
```



と出力される. ウィンドウ左上に表示されるマウスカーソルの座標を目安にするとよい. また, ウィンドウ上の座標値は Copy/Paste することができる.

ソースファイル

origin.c

機能) 中間ファイル (GPMDVIFILE) の内容を *SATELLITE* ウィンドウに表示する.

形式) `prev([filename])`

パラメータ) filename : GPMDVIFILE の名前 (String)

解説) 省略した場合は, “GPMDVIFILE1” のデータを表示する.

ソースファイル

prev.c

機能) グラフィック表示のスケールの指定.

形式)

<pre>scale(xtyp, xaxs, ytyp, yaxs [, scl1, scl2][, scl3, scl4]) scale(xtyp, xaxs, ytyp, yaxs, ztyp, zaxs [, scl1, scl2][, scl3, scl4][, scl5, scl6])</pre>
--

- パラメータ)
1. xtyp : X 軸のスケール形式 (“N” or “L”)
“N” LINEAR 軸
“L” LOG 軸
 2. xaxs : X 軸のスケール設定方式 (“A”, “F” or “D”)
“A” 自動設定
“F” マニュアル設定
“D” デフォルト値設定 (前回処理したときの値)
 3. ytyp : Y 軸のスケール形式 (“N” or “L”)
“N” LINEAR 軸
“L” LOG 軸
 4. yaxs : Y 軸のスケール設定方式 (“A”, “F” or “D”)
“A” 自動設定
“F” マニュアル設定
“D” デフォルト値設定 (前回処理したときの値)
 5. ztyp : Z 軸のスケール形式 (“N” or “L”)
“N” LINEAR 軸
“L” LOG 軸
 6. zaxs : Z 軸のスケール設定方式 (“A”, “F” or “D”)
“A” 自動設定
“F” マニュアル設定
“D” デフォルト値設定 (前回処理したときの値)
 7. scl1 x 軸の最小スケール値
 8. scl2 x 軸の最大スケール値
 9. scl3 y 軸の最小スケール値
 10. scl4 y 軸の最大スケール値
 11. scl5 z 軸の最小スケール値

12. scl6 z 軸の最大スケール値

解説)

1. 入力を省略した場合, 現在のスケール値を表示して入力待ちとなる.
2. *SATELITE* 起動時には全軸自動設定になっている.

ソースファイル

scale.c

機能) 描画領域のサイズを指定する.

形式) `size(len1, len2)`

パラメータ) 1. len1 : X 軸方向の長さ [mm]
2. len2 : Y 軸方向の長さ [mm]

解説) 1. *SATELLITE* 起動時には len1=100[mm], len2=100[mm] に設定されている.

ソースファイル

size.c

機能) 軸を表示する際のタイトルを指定する.

形式) `title(tbuf [, "x-title", "y-title" [, "z-title"]])`

パラメータ) 1. tbuf : タイトル番号 (1, 2, 3)
2. "x-title" : X 軸のタイトル (30 文字以内)
3. "y-title" : Y 軸のタイトル (30 文字以内)
4. "z-title" : Z 軸のタイトル (30 文字以内)

解説) 1. タイトル設定法
x-title, y-title が省略された場合, 現在設定されているタイトルを表示して入力待ちになる.
2. z 軸のタイトル設定について
z-title は, x-title, y-title とともに省略した場合, 現在設定されているタイトルを表示して入力待ちになる.

ソースファイル

title.c

機能) *SATELITE* グラフィックウィンドウをクローズする.

形式) `wclose(wnum)`

パラメータ) 1. `wnum` : グラフィックウィンドウ番号 (Scalar) なお, “ALL” (String) を入力した場合は, 開いている全ウィンドウをクローズする.

ソースファイル

`wclose.c`

機能) *SATELITE* グラフィックウィンドウの画面を消去する.

形式) `we()`

パラメータ) なし

ソースファイル

werase.c

機能) *SATELITE* グラフィックウィンドウをオープンする.

形式) `wopen(wnum, size, orientation, device [, X, Y])`

- パラメータ)
1. wnum : グラフィックウィンドウ番号
 2. size : “A4”, “B4”, “Free” (Free 指定時は X,Y を指定する)
 3. orientation: 0–Portrait, 1–Landscape
 4. device: 0–Display Only, 1–Display and File, 2–File Only
 5. X : オープンするウィンドウの X 方向サイズ [pixels]
device を 1 に指定した場合は, GPMDVIFILE のファイル名 (string) . ファイル名を省略した場合は, GPMDVIFILE_n で n は, ウィンドウ番号 (wnum) が使われる.
 6. Y : オープンするウィンドウの Y 方向サイズ [pixels]

- 解説)
- マウスをウィンドウ内に移動した時には, ウィンドウ左上にポインタの座標が表示される (size=A4 or B4 のとき単位は [mm] , Free の場合は [pixels]).
 - ウィンドウ内でマウスをクリックすると, X Window のカットバッファに x,y 座標値がコピーされる. マウスの中ボタンをクリックすれば, エディタ上に座標値をペーストできる.
 - size を Free とした場合, device はディスプレイのみに設定される.

ソースファイル

wopen.c

ニューラルネットシミュレータ

BPS

機能) テスト (認識) 結果ファイルから snapshot へ活性値をロードする.

形式) `buf = actload(pnum, unum, fname)`

パラメータ) 1. pnum : パターンの軸の指定, またはパターン番号の指定 (X, Y or num)
 X パターンを X 軸にとる
 Y パターンを Y 軸にとる
 num その番号の活性値を対象とする
 2. unum : ユニットの軸の指定, またはユニット番号の指定 (X, Y or num)
 X ユニットを X 軸にとる
 Y ユニットを Y 軸にとる
 num その番号の活性値を対象とする
 3. fname : テスト (認識) 結果ファイル名

戻り値) buf : 活性値を出力するオブジェクト (Snapshot)

ソースファイル

getparam.c loadlib.c actload.c

機能) シミュレーションに必要なパラメータをパラメータファイルから読み込む。

形式) `bpload(fname)`

パラメータ) 1. fname : パラメータファイル名

解説) 1. パラメータファイルの識別子には自動的に “.prm” が付けられる。

参照) BPSAVE

ソースファイル

bpload.c

機能) 現在設定されているシミュレーションに必要なパラメータをパラメータファイルに保存する

形式) `bpsave(fname)`

パラメータ) 1. fname : パラメータファイル名

解説) 1. パラメータファイルの識別子には自動的に “.prm” が付けられる.
2. パラメータはコマンドリファレンス “PINIT” もしくは User’s Manual 表 6.3 を参照して下さい .

参照) BPLOAD

ソースファイル

bpsave.c

機能) バッファのデータに対し、相関を計算し、データを2次元バッファに相関マトリクスとして格納する。

形式) `bufout = cor(buf, mode)`

パラメータ) 1. buf : データが格納されている Snapshot
2. mode : 相関モード (C or D)
C:相関
D:ユークリッド距離

戻り値) bufout : ストア先の Snapshot

ソースファイル

correlat.c

機能) 学習回数, 誤差値などの表示間隔を設定する.

形式) `disp(dint, str)`

パラメータ) 1. dint : 学習回数, 誤差, コメント等の表示間隔
2. str : 学習時に表示するコメント

ソースファイル

disp.c

機能) 評価関数を演算し、データを2次元バッファへ格納する.

形式) `buf1 = errfunc(his1, l1, us1, ud1, min1, max1, d1, l2, us2, ud2, min2, max2, d2)`

パラメータ) 1. his1 : ウェイトヒストリ(ブロック)番号
2. l1 : 結合元層番号
3. us1 : 結合元ユニット番号
4. ud1 : 結合先ユニット番号
5. min1 : 結合重み最小値
6. max1 : 結合重み最大値
7. d1 : データポイント数
8. his2 : ウェイトヒストリ(ブロック)番号
9. l2 : 結合元層番号
10. us2 : 結合元ユニット番号
11. ud2 : 結合先ユニット番号
12. min2 : 結合重み最小値
13. max2 : 結合重み最大値
14. d2 : データポイント数

戻り値) buf1 : 格納先の Snapshot

解説) 1. 指定した結合重み(1 and 2)を変化させ、評価関数を計算する. このとき、指定した結合重み以外はSETRECで指定したウェイトヒストリ番号の結合重みに固定してある.

ソースファイル

charfunc.c filehdl.c getparam.c nethhdl.c
learnlib.c errfunc.c

機能) エラー履歴ファイルから誤差値を Snapshot へロードする.

形式) `buf = errload(it, unum, fname)`

パラメータ) 1. it : 学習回数の軸の指定, または履歴番号の指定 (X, Y or num)
X 学習回数を X 軸にとる
Y 学習回数を Y 軸にとる
num その番号の誤差を対象とする
2. unum : ユニットの軸の指定, またはユニット番号の指定 (X, Y, S or num)
X ユニットの X 軸にとる
Y ユニットの Y 軸にとる
S 総和誤差を対象とする
num その番号のユニット誤差を対象とする
3. fname : エラー履歴ファイル名

戻り値) buf : 誤差値を格納するオブジェクト (Snapshot)

ソースファイル

getparam.c loadlib.c errload.c

機能) エラーヒストリファイルに関する設定を行う。

形式) `error(fname, sint, sdir [, smod])`

パラメータ)

1. fname : エラーヒストリファイル名
2. sint : エラーヒストリストア間隔
3. sdir : エラーヒストリストア方向 (R or D)
R レコード方向
D データポイント方向
4. smod : エラーヒストリストアモード (A or O)
A 追加
O 上書き

解説)

1. エラーヒストリファイルの識別子には自動的に “.bhe” が付けられる。
2. smod(エラーヒストリストアモード) は, sdir がレコード方向の時のみ設定する。

ソースファイル

error.c

機能) 各層のユニット特性とバイアスユニットの有無を設定する.

形式) `function([p1, p2, p3, ..., p10])`

パラメータ) 1. p1 : 入力層のユニットの特性, バイアスユニットの有無の設定 (LN,LA,SN or SA)

	LN	LA	SN	SA
ユニット特性	Linear	Linear	sigmoid	sigmoid
バイアスユニット	無	有	無	有

2. p2 : 第2層目のユニットの特性, バイアスユニットの有無の設定 (LN,LA,SN or SA)

3. p_i : 第i層目のユニットの特性, バイアスユニットの有無の設定 (LN,LA,SN or SA)

解説) 1. LAYERで設定した層数分のパラメータを入力する. 入力を略した場合, 現在のユニット特性, バイアスの有無を表示して入力待ちとなる.

2. LAYERで層数を設定した後に, 本コマンドを実行すること.

参照) LAYER

ソースファイル

function.c

機能) 学習アルゴリズムと学習パラメータを設定する.

形式) `lalgo(mode, alg, p1 [, p2, p3, p4, p5, p6])`

パラメータ)

1. mode : 一括学習, 逐次学習の選択
 - S 一括学習
 - P 逐次学習
2. alg : 学習アルゴリズム (1~5)
 - 1 steep 法
 - 2 momentum 法
 - 3 Vogl 法
 - 4 Jacobs 法
 - 5 momentum Vogl 係数法
 - 6 落合法
3. p1 : 学習率
4. p2 : 慣性率
5. p3 : Vogl&落合アルゴリズム用学習率増加係数
6. p4 : Vogl&落合アルゴリズム用学習率減少係数
7. p5 : Vogl アルゴリズム用閾値
8. p6 : 落合アルゴリズム用平滑化微係数
9. str : 構造学習法 (0~3)
 - 0 構造学習無し
 - 1 Weight Decay 法
 - 2 忘却付学習法
 - 3 側抑制学習法
10. ps : 構造学習用効果率係数

解説)

1. 学習パラメータ (p1~p5,str,ps) は,alg により次のように設定する.
入力を略した場合, 現在の学習パラメータを表示して入力待ちとなる.
構造学習法strを指定し, spの入力を略した場合, 現在の学習パラメータを表示して入力待ちとなる. str 以前を略した場合, 構造学習は行われないものと判断され, str,sp は入力待ちにならない.

alg	p1	p2	p3	p4	p5	p6	str	ps
1	○	—	—	—	—	—	—	—
2	○	○	—	—	—	—	○	○
3	○	○	○	○	○	—	—	—
4	○	○	○	○	—	—	—	—
5	○	○	—	—	—	—	—	—
6	○	○	○	○	—	○	○	○

ソースファイル

lalgo.c

機能) ネットワークの層数, 各層のユニット数を設定する.

形式) `layer(n [, lnum1, lnum2, lnum3, ..., lnum10])`

パラメータ) 1. n : 層数 ($3 \leq N \leq 10$)
 2. lnum1 : 入力層のユニット数
 3. lnum2 : 第2層目のユニット数
 4. lnum_i : 第i層目のユニット数

解説) 1. 指定した層数分だけユニット数を入力する. ユニット数の入力を略した場合,
 現在のユニット数を表示して入力待ちとなる.

ソースファイル

layer.c

機能) 学習を行う。

形式) `learn(buf)`

パラメータ) 1. buf : バッファ名 (0 or name)
0 総和誤差をバッファに出力しない
name 総和誤差を出力するバッファ名

解説) 1. あらかじめ設定コマンド群を実行し, 学習に必要なパラメータを設定するか, BPLOAD を実行し, パラメータファイルからパラメータを読み込んでおく必要がある。
2. *SATELLITE* のバッファモニタ機能を利用して, 学習誤差のリアルタイム表示が可能である。利用時には, あらかじめ buf と対応するモニタ機能を起動しておく必要がある。

参照) LAYER, FUNCTION, WEIGHT, ERROR, TEACH, LALGO, LEND, DISP, BM

ソースファイル

charfunc.c filehdl.c getparam.c nethhdl.c
wgtrenew.c learnlib.c learn.c

機能) 学習の終了条件を設定する.

形式) `lend(err, n)`

パラメータ) 1. `err` : 学習終了誤差
2. `n` : 学習回数

解説) 1. 総和誤差が`err` 以下か, 学習回数が `n` 回になれば学習を終了する.

ソースファイル

`lend.c`

機能) BPS パラメータの現在の設定値を表示する.

形式) `pdisp()`

パラメータ) なし

参照) BPLOAD,BPSAVE

ソースファイル

`pdisp.c`

機能) シミュレーションに必要な全てのパラメータの初期設定を行う.

形式) `pinit()`

パラメータ) なし

解説) 各パラメータの初期設定状態は, 以下のようになっている.

1. 層数 : 0
2. ユニット数 : 0
3. ユニットの特性 : EOS
4. 結合重みの初期値生成アルゴリズム : random
5. 乱数の種 : 1
6. 結合重み初期値 最大値 : 1.0
7. 結合重み初期値 最小値 : -1.0
8. イニțialライズウェイトファイル名 : EOS
9. ウェイトヒストリファイル名 : EOS
10. ウェイトストアインターバル : 1
11. ウェイトストアモード : append
12. エラーヒストリファイル名 : EOS
13. エラーストアインターバル : 1
14. エラーストアディレクション : record
15. エラーストアモード : append
16. 入力データファイル名 : EOS
17. 教師データファイル名 : EOS
18. 入力開始パターン番号 : 0
19. 入力最終パターン番号 : 0
20. 学習モード : 一括学習
21. 学習アルゴリズム : momentum
22. 学習率 : 0.0
23. 慣性率 : 0.0
24. vogl アルゴリズム用増加係数 : 0.0

- 25. vogl アルゴリズム用減少係数 : 0.0
- 26. vogl アルゴリズム用閾値 : 0.0
- 27. 落合アルゴリズム用ファクタ : 0.0
- 28. 学習終了誤差 : 0.0
- 29. 学習回数 : 0
- 30. 表示間隔 : 0
- 31. コメント : EOS
- 32. テスト用ウェイトヒストリファイル名 : EOS
- 33. ウェイトヒストリ番号 : 0
- 34. テストデータファイル名 : EOS
- 35. テストデータ入力開始パターン番号 : 0
- 36. テストデータ入力最終パターン番号 : 0
- 37. 入力層番号 : 0
- 38. 出力層番号 : 0
- 39. テスト結果ファイル名 : EOS

機能) ネットワークのテスト (認識) 及びネットワーク構造表示を行う.

形式) `rec(stor, disp [, mode, min, max, fname1, fname2])`

パラメータ) 1. stor : SETRECにより設定したテスト (認識) 結果ファイルへのストア
0 ストアしない
1 ストアする
2. disp : ネットワーク構造表示
0 表示しない
1 表示する
3. mode : 表示モード
0 活性値を色の变化で表示する
1 活性値を正方形の大きさで表示する
2 認識を行わず, 構造表示のみを行う (特性関数のマークを書く)
3 認識を行わず, 構造表示のみを行う (特性関数のマークは書かない)
4. min : スケール最小値
5. max : スケール最大値
6. fname1 : 教師データファイル名 (教師データも共に表示する)
7. fname2 : エラーファイル名 (教師データとの誤差をこのファイルにストアする)

解説) 1. あらかじめBPLOADを実行してパラメータを読み込んでおくか, 設定コマンドを実行して必要なパラメータを設定しておく必要がある.
2. 教師データファイル名, エラーファイル名は省略しても入力待ちにはならない.

参照) LAYER, FUNCTION, SETREC

ソースファイル

charfunc.c filehdl.c getparam.c nethhdl.c
trace.c testlib.c test.c

機能) 結合加重の逆投影演算を行い, 2次元バッファ格納する.

形式) `buf = rvmap(lay1, lay2, his)`

パラメータ) 1. lay1 : 出力層番号
2. lay2 : 入力層番号
3. his : ウェイトヒストリ番号

戻り値) buf : 格納先 Snapshot

ソースファイル

charfunc.c filehdl.c getparam.c nethndl.c
rvmap.c

機能) ネットワークのテスト (認識) に関するパラメータを設定する.

形式) `setrec(fname1, hisno, fname2, ps, pe, ilay, olay, fname3)`

パラメータ)

1. fname1 : ウェイトファイル名
2. hisno : ウェイトヒストリ番号
3. fname2 : 入力データファイル名
4. ps : 入力開始パターン番号
5. pe : 入力最終パターン番号
6. ilay : 入力層番号
7. olay : 出力層番号
8. fname3 : テスト (認識) 結果出力ファイル名

解説)

1. ウェイトファイル (fname1) の識別子には自動的に “.bhw” が付けられる
2. ウェイトヒストリ番号 (hisno) は, ブロック番号に対応する.
3. 入力データファイル (fname2) の識別子には自動的に “.dat” が付けられる
4. 出力ファイル (fname3) の識別子には自動的に “.brc” が付けられる
5. 入力層を第0層とする

ソースファイル

setrec.c

機能) SIGMOID 曲線上に活性値をプロットする. または, 入力総和値のヒストグラムを描く.

形式) `sigmoid(lay, unit, mode, n)`

パラメータ) 1. lay : 対象ユニットの層番号
2. unit : 対象ユニット番号
3. mode : モード (P or H)
P:シグモイド曲線上に活性値をプロットする.
H:入力総和のヒストグラムを描く
4. n : mode が P のときには, シンボル番号 (GRAPH コマンド参照), H のときには, 分割数である.

ソースファイル

charfunc.c filehdl.c getparam.c nethhdl.c
testlib.c sigmoid.c

機能) 入力データ, 教師データに関する設定を行う.

形式) `teach(fname1, fname2, ps, pe)`

パラメータ) 1. fname1 : 入力データファイル名
 2. fname2 : 教師データファイル名
 3. ps : 入力開始パターン番号
 4. pe : 入力最終パターン番号

解説) 1. データファイルの識別子には自動的に “.dat” が付けられる

ソースファイル

teach.c

機能) ウェイトの初期値生成に必要なパラメータを設定する.

形式) `walgo(alg, fname, seed, rmax, rmin)`

パラメータ) 1. alg : 初期値生成アルゴリズム (J or R)
J JIA のアルゴリズム
R 一様乱数
2. fname : 出力する初期値ファイル名
3. seed : 初期値の種
4. rmax : 生成する初期値の範囲 (最大値)
5. rmin : " (最小値)

解説) 1. パラメータファイルの識別子には自動的に “.bhw” が付けられる

ソースファイル

walgo.c

機能) ウェイトヒストリファイルに関する設定を行う.

形式) weight(fname1, fname2, sint, smod)

パラメータ) 1. fname1 : ネットワークを構成するためのウェイトが格納されているファイル名
 2. fname2 : ウェイトヒストリーファイル名
 3. sint : ウェイトヒストリーストア間隔
 4. smod : ウェイトヒストリーストアモード (A or O)
 A 追加 (レコード方向にアペンド)
 O 上書き (オーバーライト)

解説) 1. パラメータファイルの識別子には自動的に “.bhw” が付けられる

ソースファイル

weight.c

機能) ウェイトヒストリファイルから Snapshot へ結合重み値をロードする.

形式) `buf = wgtload(it, lnum, unum1, unum2, fname [, bias])`

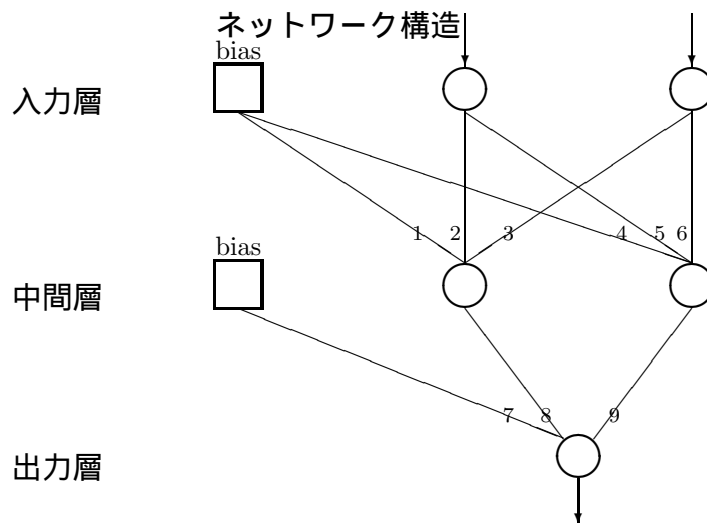
- パラメータ)
1. `it` : 学習回数の軸の指定, 及びヒストリ番号の指定 (X, Y or num)
 - X 学習回数を X 軸にとる
 - Y 学習回数を Y 軸にとる
 - num その番号のウェイトを対象とする
 2. `lnum` : ウェイト結合元の層番号 (≥ 0)
 3. `unum1` : 結合元ユニットの軸の指定, 及びユニット番号の指定 (X, Y or num)
 - X 結合元ユニットを X 軸にとる
 - Y 結合元ユニットを Y 軸にとる
 - num その番号のユニットを結合元とするウェイトを対象とする
 4. `unum2` : 結合先ユニットの軸の指定, 及びユニット番号の指定 (X, Y or num)
 - X 結合先ユニットを X 軸にとる
 - Y 結合先ユニットを Y 軸にとる
 - num その番号のユニットを結合先とするウェイトを対象とする
 5. `fname` : ウェイトヒストリファイル名
 6. `bias` : 結合元のユニットとしてバイアスも対象に加える場合, 1 を入力する

戻り値) `buf` : 結合重み値を格納するオブジェクト (Snapshot)

解説)

1. 2次元バッファの X 軸は, 学習, 結合元ユニット, 結合先ユニットのうち, 1つのみ指定できる. 例えば, 学習回数と結合元ユニットの両方を X 軸に指定することはできない (Y 軸についても同様).

2. 使用例



入力例

```
buf = wgtload( 1, 0, X, Y, filename )
```

- ・ 学習番号 : 1
- ・ 結合元の層番号 : 0(入力層)
- ・ 結合元のユニット : X 軸
- ・ 結合先のユニット : Y 軸

2次元 snapshot

X方向 (入力層ユニット No.)

Y方向
(中間層
ユニット No.)

重み値 2	重み値 3
重み値 5	重み値 6

ソースファイル

charfunc.c filehdl.c getparam.c nethndl.c
loadlib.c wgtload.c

機能) ウェイトファイルに任意のリンクの重みを設定する.

形式) `wgtset(lay, us, ud, data)`

パラメータ)

1. lay : 層番号
2. us : リンク結合元のユニット番号
3. ud : リンク結合先のユニット番号
4. data : 重み値

ソースファイル

wgtset.c

機能) ウェイトの初期値を生成し, 設定したファイルに格納する.

形式) `winit()`

パラメータ) なし

解説) 1. あらかじめBPLOADを実行してパラメータを読み込んでおくか, 設定コマンドを実行して必要なパラメータを設定しておく必要がある.

参照) LAYER, FUNCTION, WALGO

ソースファイル

charfunc.c filehdl.c getparam.c nethndl.c
winit.c

神経回路シミュレータ

NCS

機能) NCS で使用するモデルファイル名を定義する.

形式) `nassign(filename {, header} {, library})`

パラメータ) 1. filename : ファイル名
2. header : ユーザ関数用ヘッダーファイル名
3. library : ユーザ関数用ライブラリ名

解説) 1. モデルファイルの識別子は自動的に “.mdl” が付けられる.
2. assign されたモデルファイル名は, SATELITE のワークエリア内のファイル SCFN.NCS に格納される.
3. パラメーター 2, 3 の header, library は, 拡張子が “.h” の場合ヘッダーファイル名と判断され, それ以外はライブラリ名と判断される.
4. ユーザ関数用ヘッダーファイル名はフルパスまたは, 相対パスで指定する.
5. ユーザ関数用ライブラリ名はフルパスおよびフルネームで指定する.
6. ファイル名に”?”を指定した場合, 現在 assign されているファイル名, ユーザ関数用ヘッダーファイル名, ユーザ関数用ライブラリ名が表示される.

ソースファイル

nasgn.c

機能) NCS 言語を C 言語に変換する.

形式) `npp({model } {, header})`

パラメータ) 1. model : モデルファイル名
2. header : ユーザ関数用ヘッダーファイル名

解説) 1. モデルファイルの識別子は自動的に “.mdl” が付けられる.
2. モデルファイル名を指定して NPP を実行すると自動的に指定したモデルファイルが assign される.
3. モデルファイル名を省略した時は, assign されているモデルファイルが対象となる.
4. プリプロセッサを通すと C 言語のソースファイル, ヘッダファイル, シミュレーション条件ファイル群, assign ファイルが SATELITE のワークエリア内に生成される.
5. ユーザ関数用ヘッダーファイル名を指定して NPP を実行すると自動的に指定しヘッダーファイルが assign される.
6. ユーザ関数用ヘッダーファイル名はフルパスまたは, 相対パスで指定する.
7. ユーザ関数用ヘッダーファイル名を省略した時は, assign されていれば, そのユーザ関数用ヘッダーファイルが対象となる.

ソースファイル

nnpp.l nnpp.y list.c ncs_func_lib.c

機能) NPP で変換された C 言語のソースファイルをコンパイルし, NCS ライブラリとのリンクを行い, 実行形式を作成する.

形式) `nlink({opt} {, flag} {, library})`

パラメータ) 1. opt : コンパイル時の最適化レベルの指定 (コンパイラに依存)

 -g デバッガを使用するための指定

 -O~-O4 最適化レベル 1~4

2. flag : エラー or オブジェクトファイル用フラグ

 E エラーファイルを出力する.

 O オブジェクトファイルを出力する (NPE のため).

 N エラーファイル, オブジェクトファイルとも出力する.

 その他 どちらも出力しない.

3. library : ユーザ関数用ライブラリ名

解説) 1. NLINK は, shell スクリプトも用いている.

2. コンパイルとリンクには “cc” または “gcc” を使用する. “cc” か “gcc” かは, NCS を make した時にどちらが使用されたかによって決定されている.

3. コンパイル時には, ヘッダファイルのサーチパスに

 “/usr/local/lib/sl-include”

 ライブラリのサーチパスに

 “/usr/local/lib/sl-lib”

 をそれぞれ加えている.

4. flag 省略時はエラーファイル (拡張子 “.err”), オブジェクトファイル (拡張子 “.o”) とともに出力されない.

5. 最適化レベルなど, コンパイル, リンクオプションの詳細は, UNIX のマニュアルなどを参照のこと (cc, gcc のバージョンや OS 等に依存している).

6. ユーザ関数用ライブラリ名を指定して NLINK を実行すると自動的に指定しライブラリ名が assign される.

7. ユーザ関数用ライブラリ名はフルパスおよびフルネームで指定する.

8. ユーザ関数用ライブラリ名を省略した時は, assign されていれば, そのユーザ関数用ライブラリが対象となり, そうでない場合はライブラリを使用しない.

ソースファイル

nlink.c

機能) プリプロ&コンパイル&リンクの自動実行をする.

形式) `nmake()`

パラメータ) 1. なし

解説) 1. 作成したモデルソースファイルから実行形式のファイルを作成する.
2. `nassign` コマンドで `assign` されているモデルファイルが対象となる.

ソースファイル

`nmake.c`

機能) 時間情報を設定する.

形式) `ntime(last, cal, str {, interval})`

パラメータ) 1. last : 計算時間
2. cal : 計算刻み
3. str : データをストアする間隔
4. interval : データをファイルに書き込む間隔

解説) 1. 一度のデータファイル書き込みで, str で設定した値によって決まる回数分のデータが書き込まれる.
2. $cal \leq str < last$.
3. 書き込み刻みとは計算結果を出力バッファに書き込む刻み時間である. $itv > last$ の時 last 時に書込まれる.
4. 書き込み刻みを小さく取りすぎると, シミュレーション時間が長く必要になるので適切な値を選ぶこと.
5. このコマンド実行時には, npp コマンドまたは nmake コマンドの実行によって, シミュレーション条件ファイル群が生成されている必要がある.

ソースファイル

ntime.c

機能) 外部入力 (刺激) を設定する.

形式) `nstim(mdl, com, type, p1 { , p2, p3, p4, p5 })`

パラメータ) 1. mdl : モジュール名
 2. com : コンポーネント番号
 3. type : 入力波形の指定
 P パルス関数
 R ランプ関数
 B バッファ入力

4. p1~p5 : パラメータ列

入力波形	p1	p2	p3	p4	p5
パルス関数 (P)	入力開始時刻	入力初期値	高さ	時間幅	周期
ランプ関数 (R)	入力開始時刻	入力初期値	傾き	—	—
バッファ入力 (B)	バッファ名	{ 配列番号 }	{ 時間情報 }	—	—

解説) 1. ファイル及びバッファ入力においては, Euler 法, 自動刻み幅積分法, RKG 法を選択した場合いずれにおいても, データにない点は補間して用いられる. なお, 補間には4次のラグランジュ補間を使用している.
 2. NTIME で指定する last/cal は, バッファ入力のデータ点数を越えてはならない.
 3. バッファ入力の「配列番号」とは, 入力バッファに series 型の1次元配列を用いた場合, 何番目の series データを使用するのかを指定する. デフォルトは0.
 4. バッファ入力の「時間情報」には, 全部の入力系列の時刻を格納したバッファ名を指定する. ntime コマンドで指定された計算刻みで計算されるが, ここで指定されたバッファを調べ, 計算時刻のデータがあるのであれば, 補間せず計算を行う (通常は Euler 法だと $h/2$ の点が, RKG 法だと $h/4, h/2, 3h/4$ の点が補間されている [$h:ntime$ で指定した計算刻み]).
 5. このコマンド実行時には, npp コマンドまたはnmake コマンドの実行によって, シミュレーション条件ファイル群が生成されている必要がある.

ソースファイル

nstim.c

機能) 出力情報を設定する.

形式) `nout(buff, { , num } mdl, com, type { , val })`

パラメータ) 1. buff : 出力値を格納するバッファ番号
2. num : 出力値を格納する配列番号
3. mdl : モジュール名
4. com : コンポーネント番号
5. type : 出力情報
 1 出力値
 2 入力値
 3 内部変数値
6. val : type=3 を指定したとき, 内部変数名を指定する.

解説) 1. 引数に指定するバッファ名は, 事前に series 宣言されたものを使用する必要がある.
2. num を指定した場合, series 変数の配列の num 番目に出力される. 例えば, buff に “out”, num に “3” を指定した場合, series 変数 “out[3]” に結果が出力される.
3. このコマンド実行時には, npp コマンドまたは nmake コマンドの実行によって, シミュレーション条件ファイル群が生成されている必要がある.

ソースファイル

nout.c

機能) パラメータを変更する.

形式) `npara(mdl, var, num)`

パラメータ) 1. mdl : モジュール名
 2. var : パラメータ名
 3. num : パラメータの設定値

解説) 1. NCS 言語記述においてパラメーター宣言された内部変数のみに有効である.
 2. このコマンド実行時には, npp コマンドまたはnmake コマンドの実行によって, シミュレーション条件ファイル群が生成されている必要がある.

ソースファイル

npara.c

機能) 積分方式の指定および最大セル数を変更する.

形式) `ninteg(type [, mcell, relerr])`

パラメータ) 1. type : 積分方式の指定
F 自動刻み積分法
R ルンゲ-クッタ-ギル法
E オイラー法
2. mcell : 最大セル数
3. relerr : 数値積分の相対許容誤差

解説) 1. 最大セル数とは, cell, synapse, gap 文で定義した配列の最大値.
2. このコマンドを指定しなかった場合, 自動刻み積分法で計算される.
3. このコマンド実行時には, npp コマンドまたは nmake コマンドの実行によって, シミュレーション条件ファイル群が生成されている必要がある.

ソースファイル

ninteg.c

機能) ディレイ情報を設定する.

形式) `ndelay(mdl, var, dt [, init])`

パラメータ) 1. mdl : モジュール名
 2. var : 内部変数名
 3. dt : ディレイ時間
 4. init : 出力の初期値 (省略時は, モデル記述で指定した値になる.)
 AUTO 時刻 0 の出力値を初期値とする

解説) 1. ディレイはモジュール入力のみ設定可能.
 2. ディレイはQUEUEを使用することによって実現している. 時刻 0 から dt までの間は, init の値が出力される.
 3. NETWORK() 中で, 2 度以上呼び出しのあるモジュールでの動作は補償しない.
 4. このコマンド実行時には, npp コマンドまたはnmake コマンドの実行によって, シミュレーション条件ファイル群が生成されている必要がある.

ソースファイル

ndelay.c

機能) パラメータリストを表示する.

形式) `nlist(mdl)`

パラメータ) 1. mdl : モジュール名
2. ALL : 全てのパラメータを表示する

解説) 1. mdl に ALL を指定すると, 全てのパラメータを表示する.
2. 端末の表示行数の限界を越えた場合, 環境変数 PAGER で指定されたページャを起動して表示する. PAGER が設定されていない場合, “more” が使用される.
3. このコマンド実行時には, npp コマンドまたは nmake コマンドの実行によって, シミュレーション条件ファイル群が生成されている必要がある.

ソースファイル

nlist.c

機能) シミュレーション条件を表示する.

形式) `nsclist(type)`

パラメータ) 1. type : 表示内容
S 刺激条件の表示
O 出力条件の表示
T 時間情報の表示
D デレイ情報の表示

解説) 1. 端末の表示行数の限界を越えた場合, 環境変数 PAGER で指定されたページャを起動して表示する. PAGER が設定されていない場合, “more” が使用される.
2. このコマンド実行時には, npp コマンドまたは nmake コマンドの実行によって, シミュレーション条件ファイル群が生成されている必要がある.

ソースファイル

nsclst.c

機能) シミュレーション条件を削除する.

形式) `nerase(type, var { , dim})`

パラメータ) 1. type : 削除内容
S 刺激情報
O 出力情報
D デレイ情報
2. var : 変数名
3. dim : 配列番号

解説) 1. no に ALL を指定すれば, 全ての条件を削除する.
2. 出力に配列を使用している場合, dim に配列番号も指定する.
3. このコマンド実行時には, npp コマンドまたは nmake コマンドの実行によって, シミュレーション条件ファイル群が生成されている必要がある.

ソースファイル

nerase.c

機能) パラメータを取得する.

形式) ngetp(mdl, var)

パラメータ) 1. mdl : モジュール名
 2. var : パラメータ名

解説) 1. パラメーター値を返す (Scalar).
 2. NCS 言語記述においてパラメーター宣言された内部変数のみに有効である.
 3. このコマンド実行時には, npp コマンドまたはnmake コマンドの実行によって, シミュレーション条件ファイル群が生成されている必要がある.

ソースファイル

ngetp.c

機能) 計算を実行する.

形式) `ncal()`

パラメータ) なし

解説) 1. このコマンド実行時には, `npp` コマンドまたは `nmake` コマンドの実行によって, シミュレーション条件ファイル群が生成されている必要がある.

ソースファイル

`ncal.c`

機能) エディタを起動する.

形式) `ne()`

パラメータ) なし

解説)

1. assign されたモデルファイルを編集の対象として, エディタを起動する.
2. 環境変数 EDITOR が設定されている場合それを起動し, 設定されていない場合は vi エディタが起動される.

ソースファイル

ne.c

機能) `nout` で指定できる変数の最大個数の変更

形式) `nchgbuff(number)`

パラメータ) 1. `number` : 変数の個数の最大数

解説) 1. モデル記述内で `exinput`, `output`, `observable` 文によって指定した変数を, `nout` コマンドで指定できる個数はある値 (デフォルトは 255) に制限されている. 大規模モデルなどで, 多くの変数を取り出すようにしたいときなどに使用する.

2. このコマンド実行時には, `npp` コマンドまたは `nmake` コマンドの実行によって, シミュレーション条件ファイル群が生成されている必要がある.

ソースファイル

`nchgbuff.c`

非線形パラメータ推定システム

NPE

機能) データファイルを指定する .

形式) `cdata(file_name)`

パラメータ) 1. file_name : データファイル名

解説)

- モデル出力の数だけ、連続したレコードに実験データが格納されていなければならない .
- データファイルの格納形式は、モデルの出力1個に対して1レコードを対応させる .

使用例) 1-出力モデルのデータとしてサイン波、1000点を与える .

```
% series x,y[1];  
% x = (0~(1000-1))/(1000-1);  
% y[0] = sin( 2*PI*x );  
% $"sin1.dat" = trans(y);  
% index($"sin1.dat");  
[0]:%           1           1000
```

参照) CWEIGHT

ソースファイル

setdata.c common1.c common2.c

機能) 設定されている推定条件を削除する .

形式) `cdel(type)`

パラメータ) 1. type : 削除する推定条件の種類

METHOD LSEARCH MODEL INIT SCALE TERM NUMBER POINT
DATA WEIGHT RESULT HISTORY INTEG SCOPE NORM DISP

ソースファイル

delblock.c common1.c common2.c

機能) 表示する評価関数値の計算方法を指定する．

形式) cdisp(type)

パラメータ) 1. type : 表示する評価関数値の計算方法

0 重みなし

1 重みつき

解説) • 与えるデータを $t_{i,j}$, モデルからの出力を $o_{i,j}$, 重みを $w_{i,j}$ とすると , 評価関数値 $Value(2\text{-ノルム})$ は

$$Value = \sum_{i,j} w_{i,j} (t_{i,j} - o_{i,j})^2$$

である．評価関数値を表示する際に $Value$ を使うか , 重みを全て1として計算した $Value'$ を用いるかを指定する．

- 表示する評価関数値の計算方法であって , 停止基準には関係しない．ただし , 評価関数値の履歴に格納される値は , このコマンドで指定した方法で計算される．
- 省略した場合は1(重みつき) が設定される．

参照) CHISTORY CNORM

ソースファイル

setdisp.c common1.c common2.c

機能) パラメータおよび評価関数値の履歴を格納する方法を指定する．

形式) `chistory(file_name, interval)`

パラメータ) 1. file_name : 格納するファイル名
2. interval : 格納間隔 (interval = 0 は interval = 1 と同じ)

解説) 1. 推定対象のパラメータ値，評価関数値の履歴を，指定したファイルに指定した格納間隔でアペンドする．ただし，停止条件を満たした場合は，格納間隔によらずアペンドする．
2. 評価関数値の履歴は指定したファイルの最後のレコードに格納される．
3. 格納される評価関数値はCDISP コマンドで指定した方法で計算される．また，制約項の値は加えられない．

参照) CDISP

ソースファイル

sethistory.c common1.c common2.c

機能) パラメータの初期値等の情報を指定する .

形式) `cinit(ninit, inum, val, flag, name, span)`

パラメータ) 1. ninit : 推定するパラメータの数
 2. inum : パラメータ番号
 3. val : パラメータの初期値
 4. flag : パラメータの固定/可変の指定
 FIX パラメータ値を初期値で固定 (推定しない)
 VAR パラメータ値を可変 (推定する)
 5. name : パラメータの名前
 6. span : 差分間隔

解説) 1. パラメータ数 `ninit` の値を変更する場合は、それ以前に設定されていたパラメータの情報は全て失われる .
 2. `ninit` 個あるパラメータのうち、1 から数えて `inum` 番目のパラメータの情報を指定する .
 3. パラメータの名前は、使用するモデルによって次のように指定する内容が異なる .
 ・ C 言語で記述したモデルの場合
 推定実行時に表示される名前を指定する . (モデルファイルと対応させる必要はない)
 ・ NCS モデルの場合
 各種情報を設定したいパラメータを、NCS モデル記述内のモジュール名とパラメータ名を @ で接続した文字列で指定する .
 (例) BHL モジュールの `Tau_L` というパラメータを推定する場合
 `name = Tau_L@BHL`
 また、パラメータの名前は最大で 25 文字である .
 4. 各パラメータに対する偏微分は中心差分で行うため `span` は十分に小さい値でなければならない .

ソースファイル

`setinit.c` `common1.c` `common2.c`

機能) NCS モデルを用いる場合の積分方式を指定する .

形式) `cinteg(integmethod)`

パラメータ) 1. integmethod : 積分方式
R ルンゲクッタ法 (4 次)
E オイラー法
A ADAMS 法
F ADAPTIVE 法

ソースファイル

setxinteg.c common1.c common2.c

機能) 設定されている推定条件を表示する .

形式) `clist([elmnttype])`

パラメータ) 1. `elmnttype` : 表示する推定条件の種類

METHOD LSEARCH MODEL INIT SCALE TERM NUMBER POINT
DATA WEIGHT RESULT HISTORY INTEG SCOPE DISPLAY NORM

解説)

- 表示する推定条件の指定がなければ全て表示する .
- 推定条件の指定には大文字 , 小文字どちらでも構わない . また , 頭の 3 文字だけでも良い .

使用例) LSEARCH の内容を表示させる .

```
% clist("lsearch");  
  
lsearch : golden          0.0001  
  
% clist("lse");  
  
lsearch : golden          0.0001
```

ソースファイル

`npelist.c` `common1.c` `common2.c`

機能) 設定ファイルの内容 (推定条件) をコモン領域へ読み込む。

形式)

<code>cload(file_name)</code>

パラメータ) 1. file_name : 設定ファイル名

解説)

1. 追加，変更されたコモン領域の内容を，設定ファイルに格納 (CSTORE) せずに新たに読み込もうとすると，警告を発して確認を求めるフェイルセーフ機能を有している。
2. 各種コマンドの組合せのみで必要な条件を設定することが可能であるが，毎回変更しない条件を設定ファイルに書き込んでおくとう便利である。
3. 設定ファイルをはじめて作る時は各コマンドで条件を設定し，CSTORE コマンドを利用するとよい。

参照) CSTORE NPEINIT

ソースファイル

NPEload.c common1.c common2.c

機能) 停止基準の論理式を指定する .

形式) `clogic(logic)`

パラメータ) 1. logic : 停止基準の論理式

解説)

- CTERM コマンドで設定された停止基準を論理和 (|) , 論理積 (&) および括弧を用いて組み合わせる .
- CTERM コマンドよりも先に実行する必要がある .

使用例)

```
% clogic("0|1" );  
% cterm(0, 1000 );  
% cterm(1, 1.0e-04);  
% clist("term");  
term      : 0|1  
            TERM 0 = 1000  
            TERM 1 = 0.0001
```

参照 CTERM

ソースファイル

setlogic.c common1.c common2.c

機能) 直線探索法を指定する .

形式) `clsearch(linear_method, bracket_init)`

パラメータ) 1. linear_method : 直線探索法
2. bracket_init : 囲い込みの幅の初期値

解説) 1. 利用可能な直線探索法
golden 黄金分割法
cubic 三次補間法
2. ほとんどの最適化手法は下位のルーチンとして直線上で評価関数値を最小にするパラメータを求めるルーチンを必要とする . 黄金分割法はパラメータに関する偏導関数を計算する必要がないが , 三次補間法は計算しなければならない . 前者は滑らかでない関数でも計算でき , 後者は滑らかならば少ないステップ数で計算が終了するという特徴を持つ .
3. 囲い込みの幅 (最大探索幅) は自動的に拡大する .

使用例) `% clsearch("golden",1.0e-03);`
`% clist("lsearch");`

lsearch : golden 0.001

参照) CMETHOD

ソースファイル

setlsearch.c common1.c common2.c

機能) 最適化アルゴリズムを指定する .

形式) `cmethod(method)`

パラメータ) 1. method : 最適化法

解説)

- 利用可能な最適化法
 - SIMPLEX Simplex 法
 - BFGS BFGS(Broyden-Fletcher-Goldfarb-Shanno) 法
 - DFP DFP(Davideon-Fletcher-Powell) 法
 - SSVM SSVM(Self-Scaling Variables Metric) 法
 - CONJFR 共役勾配法 (Fletcher-Reeves の更新式)
 - CONJPRP 共役勾配法 (Polak-Ribière-Polyak の更新式)
- Simplex 法以外では直線探索法も指定しなければならない .
- 最適化法に一般的にベストだと言える方法は発見されていないため , いくつかの方法を試して見ることが常識となっている . 経験的には BFGS 法が優れていると言われている .

使用例) `% cmethod("bfgs");`
`% clist("method");`

`method : bfgs`

参照) CLSEARCH

ソースファイル

`setmethod.c common1.c common2.c`

機能) モデルを指定する .

形式) `cmodel(mdl_type, file_name)`

パラメータ) 1. mdl_type : モデルの形式
 USR C 言語で記述したモデル
 NCS NCS 言語で記述したモデル
 2. file_name : モデルのオブジェクトファイル名

解説) • モデルの記述方法については , ユーザーズマニュアルを参照 .

ソースファイル

setmodel.c common1.c common2.c

機能) 評価関数のノルムの計算方法を指定する．

形式) `cnorm(norm)`

パラメータ) 1. norm : ノルムのタイプ

0 無限大ノルム

1 1-ノルム

2 2-ノルム

解説) • 与えるデータを $t_{i,j}$, モデル出力を $o_{i,j}$, 重みデータを $w_{i,j}$ とすると , 評価関数は各ノルム毎に以下のように定義される .

0-ノルム

$$Value = \max_{i,j} \{ w_{i,j} |t_{i,j} - o_{i,j}| \}$$

1-ノルム

$$Value = \sum_{i,j} w_{i,j} |t_{i,j} - o_{i,j}|$$

2-ノルム

$$Value = \sum_{i,j} w_{i,j} (t_{i,j} - o_{i,j})^2$$

• タイプの指定がなければ , 2-ノルムが設定される .

参照) CDISP

ソースファイル

setnorm.c common1.c common2.c

機能) モデル出力の数を指定する .

形式) `cnumber(numwave)`

パラメータ) 1. numwave : モデル出力の数

解説)

- 実験データや重みデータはこのコマンドで指定しただけのレコード数を持たなければならない .

使用例) 1-出力モデルの例 .

```
% cnumber(1);
% clist("number");
```

```
number : 1
```

データファイルから設定する .

```
% cdata("sin1.dat" );
% cnumber(length( $"sin1.dat" ) );
```

参照) CDATE CWEIGHT

ソースファイル

setnumber.c common1.c common2.c

機能) ペナルティ関数を指定する .

形式) `cpenalty(file_name)`

パラメータ) 1. `file_name` : 制約を記述したオブジェクトファイル名

解説) 1. NPE で利用可能な制約の課し方はペナルティ法である . ペナルティ法はその名の通り , パラメータが制約条件を満たしていなければ評価関数値に大きな値 (ペナルティ) を加える . これによって , 制約条件を満たすように推定されることが期待される .

2. 制約条件はオブジェクトファイルの形式になっていなければならない .

ソースファイル

setpenalty.c

機能) データ点数を指定する .

形式) `cpoint(datapoint)`

パラメータ) 1. datapoint : データ点数

解説)

- 実験データや重みデータはこのコマンドで指定しただけのデータ点数を持たなければならない .

使用例) ファイルに格納されているデータを指定する .

```
% cdata("sin1.dat" );  
% cpoint( length( $"sin1.dat":[0] ) );
```

参照) CNUMBER CDATA CWEIGHT

ソースファイル

setpoint.c common1.c common2.c

機能) モデル出力の履歴を格納するファイル名を指定する .

形式) `cresult(file_name)`

パラメータ) 1. file_name : 格納するファイル名

解説) 1. 推定が完了したパラメータを用いてモデル出力を計算し , 指定されたファイルに格納する .

ソースファイル

setresult.c common1.c common2.c

機能) スケーリング法を指定する .

形式) `cscale(scalingmethod)`

パラメータ) 1. scalingmethod : スケーリング法
 0 スケーリングなし
 1 桁スケーリング有り (初回のみ)
 2 桁スケーリング有り (毎ステップ)
 3 re-scaling

解説)

- スケーリングを指定することで , 推定が難しい状況 (ill-condition) が改善されることが期待される .
- 指定されなかった場合は , 0(スケーリングなし) が設定される .

参照) 落合 慶広 , 榊原 学 , 臼井 支朗: “非線形最適化法に関する研究” , 豊橋技術科学大学大学院 修士論文 (1989) .

ソースファイル

setscale.c common1.c common2.c

機能) 設定されている推定条件を指定したファイルに格納する .

形式) `cstore(file_name)`

パラメータ) 1. file_name : 推定条件を格納するファイル名

解説)

- 設定ファイルをはじめて作成する時に利用すると便利である .

参照) CLOAD NPEINIT

ソースファイル

NPEstore.c common1.c common2.c

機能) 停止基準を設定する。

形式) `cterm(termnum, termvalue)`

パラメータ) 1. termnum : 停止基準の番号
0 : 最大反復回数 termvalue
1 : 評価関数値 termvalue
9 : simplex の評価関数値の標準偏差 termvalue
2. termvalue : 停止基準の値

解説)

- このコマンドで指定した停止基準値は, CLOGIC コマンドで組み合わせられ, 停止基準として用いられる。
- 必ず CLOGIC コマンドの後に実行する。

参照) CLOGIC

ソースファイル

setterm.c common1.c common2.c

機能) 評価関数に重みづけをする重みデータファイルを指定する .

形式) `cweight(file_name)`

パラメータ) 1. file_name : 重みデータファイル名

解説) 1. モデル出力の数だけ , 連続したレコードに重みデータが格納されていなければならない .
2. モデルの出力1個に対して1レコードを対応させる .

使用例) 1-出力モデルの重みデータ (1000 点, すべて 1) を生成する .

```
% series wgt[1];  
% wgt[0] = (1~1000)*0 + 1;  
% $"sin1.wgt" = trans(wgt);  
% index($"sin1.wgt");  
[0]:%          1          1000
```

参照) CDATA

ソースファイル

setweight.c common1.c common2.c

機能) パラメータ推定を実行する．

形式) `npe(res, hist)`

パラメータ) 1. `res` : 推定したパラメータを用いて計算したモデルの出力
 2. `hist` : パラメータ・評価関数値の履歴

解説)

- 設定された推定条件に従って，パラメータ推定を行なう．
- `res` に格納される内容は `cresult` コマンドで設定したファイルに格納される内容と同じ．
- `hist` に格納される内容は `chistory` コマンドで設定したファイルに格納される内容と同じ．

ソースファイル

`main.c` `common1.c` `common2.c`

機能) 推定条件を保持する領域を初期化する .

形式) `npeinit()`

パラメータ) なし

解説) 必ず NPE を利用する前に実行しなければならない .

ソースファイル

NPEinit.c

データ変換モジュール

DCM

機能) AXON pClamp の ABF 形式のファイルを *SATELLITE* の ファイルオブジェクトに変換する.

書式) `abf2satellite(filename.abf)`

パラメータ) 1. filename : 変換する abf ファイル名

解説) ABF 形式のファイルを *SATELLITE* のファイルオブジェクト (filename.dat) と、ABF ファイルに含まれるさまざまな情報を含んだファイル (filename.cnf) に変換する.

使用例) abf ファイル 2000-07-01-00000.abf を *SATELLITE* のファイルオブジェクトに変換する. タ形式に変換する.

```
% abf2satellite("2000-07-01-00000.abf")
% ls
2000-07-01-00000.abf 2000-07-01-00000.cnf 2000-07-01-00000.dat
```

バグ) いくつか実装していない形式のファイルが存在します.

ソースファイル

abf2satellite.c abf2satellite.h

機能) AXON pClamp の ATF 形式のファイルを *SATELLITE* の ファイルオブジェクトに変換する.

書式) `atf2satellite(filename.atf)`

パラメータ) 1. filename : 変換する atf ファイル名

解説) ATF 形式のファイルを *SATELLITE* のファイルオブジェクト (filename.dat) に変換する.

使用例) atf ファイル 2000-07-01-00000.atf を *SATELLITE* のファイルオブジェクトに変換する. 夕形式に変換する.

```
% atf2satellite("2000-07-01-00000.atf")
```

バグ) いくつか実装していない形式のファイルが存在します.

機能) *SATELLITE*の series 変数 を AVS のフィールドデータ形式のファイルに変換する.

書式) buf2avs(filename , x)

パラメータ) 1. filename : 拡張子を省いた出力したいファイル名 (string)
2. x : オブジェクト (series)

解説) 出力されるファイルは 2 つ存在するため, 出力するファイル名には, 拡張子を含ませないでおく.

使用例) series オブジェクト x を AVS のフィールドデータ形式に変換する.

```
% buf2avs("FieldData",x)
```

機能) *SATELLITE*の series 変数 を AVS のフィールドデータ形式のファイルに変換する.

書式) `buffer2avs(filename , x)`

パラメータ) 1. filename : 拡張子を省いた出力したいファイル名 (string)
2. x : オブジェクト (series)

解説) 出力されるファイルは 2 つ存在するため, 出力するファイル名には, 拡張子を含ませないでおく.

使用例) series オブジェクト x を AVS のフィールドデータ形式に変換する.

```
% buffer2avs("FieldData",x)
```

機能) *SATELLITE*の `series` 変数 をテキスト形式のファイルに変換する.

書式) `buf2txt(filename , format , x,y...)`

パラメータ) 1. `filename` : テキストファイル名 (`string`)
 2. `format` : フォーマット文字列
 3. `x,y,...` : オブジェクト (`series`)

解説) フォーマット文字列の書式は, 整数及び実数を扱う部分のみ C 言語と同様である.

型	フォーマット文字列		
整数	<code>%d</code>	<code>%nd</code>	
実数	<code>%f</code>	<code>%nf</code>	<code>%nmf</code>
	<code>%g</code>	<code>%ng</code>	<code>%nmg</code>
	<code>%e</code>	<code>%ne</code>	<code>%nme</code>

使用例) `series` オブジェクト `x , y` をテキストファイル `test.txt` に出力する.

```
% buf2txt("test.txt", "%f %e\n", x, y)
```

ソースファイル

buffer2text.c

機能) *SATELLITE*の *series* 変数 をテキスト形式のファイルに変換する.

書式) `buffer2text(filename , format , x,y,...)`

パラメータ) 1. `filename` : テキストファイル名 (`string`)
2. `format` : フォーマット文字列
3. `x,y,...` : オブジェクト (`series`)

解説) フォーマット文字列の書式は, 整数及び実数を扱う部分のみ C 言語と同様である.

型	フォーマット文字列		
整数	<code>%d</code>	<code>%nd</code>	
実数	<code>%f</code>	<code>%nf</code>	<code>%nmf</code>
	<code>%g</code>	<code>%ng</code>	<code>%nmg</code>
	<code>%e</code>	<code>%ne</code>	<code>%nme</code>

使用例) *series* オブジェクト `x` , `y` をテキストファイル `test.txt` に出力する.

```
% buffer2text("test.txt", "%f %e\n", x,y)
```

ソースファイル

`buffer2text.c`

機能) *SATELLITE*の series 変数 を MATLAB の Version 4 の MAT-ファイル形式に変換する.

書式) buf2mat(filename , variable , x)

パラメータ) 1. filename : 出力したいファイル名 (string)
2. variable : MATLABにおいて実際に用いられる変数名 (string)
3. x : オブジェクト (series)

解説) オブジェクトが2次元の場合, 値を行列とみなしてファイルを変換する.

使用例) series オブジェクト x を MATLAB の MAT-ファイル形式に変換する.

```
% buf2mat("Matlab.mat","Satellite",x)
```

機能) *SATELLITE*の series 変数 を MATLAB の Version 4 の MAT-ファイル形式に変換する.

書式) `buffer2matlab(filename , variable , x)`

パラメータ) 1. filename : 出力したいファイル名 (string)
2. variable : MATLABにおいて実際に用いられる変数名 (string)
3. x : オブジェクト (series)

解説) オブジェクトが2次元の場合, 値を行列とみなしてファイルを変換する.

使用例) series オブジェクト x を MATLAB の MAT-ファイル形式に変換する.

```
% buffer2matlab("Matlab.mat","Satellite",x)
```


機能) *SATELLITE*の *series* 変数 を Mathematica で使用可能なリスト形式に変換する.

書式) `buf2math(filename , x)`

パラメータ) 1. `filename` : 出力したいファイル名 (`string`)

2. `x` : オブジェクト (`series`)

解説) オブジェクトが2次元の場合, 値を行列とみなしてファイルを変換する.

使用例) `series` オブジェクト `x` を Mathematica のリスト形式に変換する.

```
% buf2math("Mathematica.dat",x)
```

ソースファイル

buffer2mathematica.c

機能) *SATELLITE*の *series* 変数 を Mathematica で使用可能なリスト形式に変換する.

書式) `buffer2mathematica(filename , x)`

パラメータ) 1. `filename` : 出力したいファイル名 (`string`)

2. `x` : オブジェクト (`series`)

解説) オブジェクトが2次元の場合, 値を行列とみなしてファイルを変換する.

使用例) `series` オブジェクト `x` を Mathematica のリスト形式に変換する.

```
% buffer2mathematica("Mathematica.dat",x)
```

ソースファイル

`buffer2mathematica.c`

機能) Genesis の disk_out オブジェクト によって出力されたファイルを *SATELITE* の series 変数 に変換する.

書式) `x = gen2buf(filename [, start , step])`

パラメータ) 1. x : 出力オブジェクト (series)
 2. filename : 入力したいファイル名 (string)
 3. start : Genesis でシミュレーションした際の開始時間 (series)
 4. step : Genesis でシミュレーションした際の時間刻み幅 (series)

解説) start および step は, 任意に付加できる引数となっているが, この引数を使用する際は, あらかじめ, series で宣言しておかなければならない.

使用例) Genesis によって出力されたファイル Genesis.dat を *SATELITE* の series 変数 x に変換する.

```
% series start,step
% x = gen2buf("Genesis.dat",start,step)
```

ソースファイル

genesis2buffer.c

機能) Genesis の disk_out オブジェクト によって出力されたファイルを *SATELLITE* の series 変数 に変換する.

書式) `x = genesis2buffer(filename [, start , step])`

パラメータ) 1. x : 出力オブジェクト (series)
2. filename : 入力したいファイル名 (string)
3. start : Genesis でシミュレーションした際の開始時間 (series)
4. step : Genesis でシミュレーションした際の時間刻み幅 (series)

解説) start および step は, 任意に付加できる引数となっているが, この引数を使用する際は, あらかじめ, series で宣言しておかなければならない.

使用例) Genesis によって出力されたファイル Genesis.dat を *SATELLITE* の series 変数 x に変換する.

```
% series start,step  
% x = genesis2buffer("Genesis.dat",start,step)
```

ソースファイル

genesis2buffer.c

機能) MATLAB によって出力された Version 4 の MAT-ファイル形式のファイルを *SATELLITE* の ファイルオブジェクトに変換する.

書式) `mat2sat(filename)`

パラメータ) 1. `filename` : 入力したいファイル名 (`string`)

解説) このコマンドにより出力されるファイルは, 実際に MATLAB で使用されていた変数名 ?? を含む `mat_??_dat` という名前になる. また, MAT-ファイル が複素数のデータである場合, 出力されるファイル名は, 実数部が `mat_??_r.dat` , 虚数部が `mat_??_i.dat` となる.

使用例) MATLAB で出力されたファイル `Matlab.mat` を *SATELLITE* のファイルオブジェクト形式に変換する.

```
% mat2sat("Matlab.mat")
```

ソースファイル

`matlab2satellite.c`

機能) MATLAB によって出力された Version 4 の MAT-ファイル形式のファイルを *SATELLITE* の ファイルオブジェクトに変換する.

書式) matlab2satellite(filename)

パラメータ) 1. filename : 入力したいファイル名 (string)

解説) このコマンドにより出力されるファイルは, 実際に MATLAB で使用されていた変数名 ?? を含む mat_??_dat という名前になる. また, MAT-ファイル が複素数のデータである場合, 出力されるファイル名は, 実数部が mat_??_r.dat , 虚数部が mat_??_i.dat となる.

使用例) MATLAB で出力されたファイル Matlab.mat を *SATELLITE* のファイルオブジェクト形式に変換する.

```
% matlab2satellite("Matlab.mat")
```

ソースファイル

matlab2satellite.c

- 機能) *Neuron* によって出力されたファイルを *SATELLITE* の ファイルオブジェクトに変換する.
- 書式) `nrn2sat(filename)`
- パラメータ) 1. `filename` : 入力したいファイル名 (`string`)
- 解説) このコマンドにより出力されるファイルは, 実際に *Neuron* で使用されていたラベルを用いたファイル名になる.
- 使用例) *Neuron* で出力されたファイル `Neuron.dat` を *SATELLITE* のファイルオブジェクト形式に変換する.

```
% nrn2sat("Neuron.dat")
```

機能) Neuron によって出力されたファイルを *SATELLITE* の ファイルオブジェクトに変換する.

書式) neuron2satellite(filename)

パラメータ) 1. filename : 入力したいファイル名 (string)

解説) このコマンドにより出力されるファイルは, 実際に Neuron で使用されていたラベルを用いたファイル名になる.

使用例) Neuron で出力されたファイル Neuron.dat を *SATELLITE* のファイルオブジェクト形式に変換する.

```
% neuron2satellite("Neuron.dat")
```

ソースファイル

neuron2satellite.c

機能) テキスト形式のファイルを *SATELITE* の `series` 型変数に変換する.

書式) `x = txt2buf(filename)`

パラメータ) 1. `x` : 出力オブジェクト (`series`)
 2. `filename` : 入力したいファイル名 (`string`)

解説) このコマンドにより出力されたオブジェクトはテキストファイルが $n \times m$ の場合、時系列を2次元の行列にみたてた形で表現される.

使用例) テキストファイル `text.txt` を *SATELITE* の `series` オブジェクト `x` に変換する.

```
% x = txt2buf("text.txt")
```

機能) テキスト形式のファイルを *SATELITE* の *series* 型変数に変換する.

書式) `x = text2buffer(filename)`

パラメータ) 1. `x` : 出力オブジェクト (*series*)
 2. `filename` : 入力したいファイル名 (*string*)

解説) このコマンドにより出力されたオブジェクトはテキストファイルが $n \times m$ の場合、時系列を2次元の行列にみたてた形で表現される.

使用例) テキストファイル `text.txt` を *SATELITE* の *series* オブジェクト `x` に変換する.

```
% x = text2buffer("text.txt")
```

ソースファイル

`text2buffer.c`

コマンド索引

ABF2SATELLITE (DCM).....	249
ABS (Mathematic Library).....	40
ACOS (Mathematic Library).....	41
ACTLOAD (BPS).....	178
AKIMA (ISPP).....	100
ALIAS (SHELL).....	2
ARAND (ISPP).....	101
ARGEN (ISPP).....	102
ASIN (Mathematic Library).....	42
ATAN (Mathematic Library).....	43
ATAN2 (Mathematic Library).....	44
ATF2SATELLITE (DCM).....	250
AVERAGE (ISPP).....	104
AXIS (GPM).....	143
BM (SYSTEM).....	78
BPBTW (ISPP).....	105
BPLOAD (BPS).....	179
BPSAVE (BPS).....	180
BREAK (SHELL).....	3
BUF2AVS (DCM).....	251
BUF2MAT (DCM).....	255
BUF2MATH (DCM).....	257
BUF2TXT (DCM).....	253
BUFFER2AVS (DCM).....	252
BUFFER2MATHEMATICA (DCM).....	258
BUFFER2MATLAB (DCM).....	256
BUFFER2TEXT (DCM).....	254
BURG (ISPP).....	106
CDATA (NPE).....	225
CDEL (NPE).....	226
CDISP (NPE).....	227
CEP (ISPP).....	108
CHISTORY (NPE).....	228
CHWIN (GPM).....	145
CINIT (NPE).....	229
CINTEG (NPE).....	230
CLIST (NPE).....	231
CLOAD (NPE).....	232
CLOGIC (NPE).....	233
CLSEARCH (NPE).....	234
CMETHOD (NPE).....	235
CMODEL (NPE).....	236
CNORM (NPE).....	237
CNUMBER (NPE).....	238
COLOR (GPM).....	146
CONST (SHELL).....	4
CONT (GPM).....	147
CONTINUE (SHELL).....	5
COR (BPS).....	181

COS (Mathematic Library).....	45
CPENALTY (NPE).....	239
CPOINT (NPE).....	240
CRESULT (NPE).....	241
CSCALE (NPE).....	242
CSTORE (NPE).....	243
CTERM (NPE).....	244
CUT (SYSTEM).....	79
CWEIGHT (NPE).....	245
DCCUT (ISPP).....	109
DEFINE (SHELL).....	6
DET (ISPP).....	110
DISP (BPS).....	182
DO (SHELL).....	7
DRAW (GPM).....	148
DUMP (SL_UTIL).....	60
EGRAPH (GPM).....	149
EIGEN (ISPP).....	111
ERRFUNC (BPS).....	183
ERRLOAD (BPS).....	184
ERROR (BPS).....	185
EVAL (SHELL).....	8
EXIST (SL_UTIL).....	59
EXIT (SHELL).....	9
EXP (Mathematic Library).....	46
EXP2 (Mathematic Library).....	47
EXTERNAL (SHELL).....	10
EXTRACT (SL_UTIL).....	61
FACTOR (GPM).....	151
FFTC (ISPP).....	112
FFTn (ISPP).....	113
FILEINDEX (SL_UTIL).....	62
FILL (SYSTEM).....	80
FIND (SYSTEM).....	81
FIR (ISPP).....	114
FIRMAKE (ISPP).....	115
FONT (GPM).....	152
FOR (SHELL).....	11
FRAME (GPM).....	153
FUNC (SHELL).....	12
FUNCTION (BPS).....	186
GARCO (SHELL).....	13
GAUSS2 (ISPP).....	116
GEN2BUF (DCM).....	259
GENESIS2BUFFER (DCM).....	260
GET (SYSTEM).....	82
GINIT (GPM).....	154
GOODBYE (SHELL).....	14
GPM2PS (GPM).....	155

GRAPH (GPM)	156	NINTEG (NCS)	215
GSOLM (GPM)	158	NLINK (NCS)	209
GSTAT (GPM)	160	NLIST (NCS)	217
HEADER (SYSTEM)	83	NMAKE (NCS)	210
HELP (SYSTEM)	84	NMEQ (ISPP)	129
HGET (SL_UTIL)	63	NORM (ISPP)	130
HIL (ISPP)	117	NOUT (NCS)	213
HISTORY (SHELL)	15	NPARA (NCS)	214
HPBTW (ISPP)	118	NPE (NPE)	246
ICEP (ISPP)	119	NPEINIT (NPE)	247
IF (SHELL)	16	NPP (NCS)	208
IIR (ISPP)	120	NRAND (ISPP)	131
IIRCOEF (ISPP)	121	NRN2SAT (DCM)	263
INDEX (SHELL)	17	NSCLIST (NCS)	218
INDEXSIZE (SL_UTIL)	64	NSTIM (NCS)	212
INLINE (SHELL)	18	NTIME (NCS)	211
INT (Mathematic Library)	48	ORIGIN (GPM)	168
INTEG (ISPP)	122	PDISP (BPS)	192
INTERP (ISPP)	123	PHASE (ISPP)	132
INV (ISPP)	124	PINIT (BPS)	193
ISDEF (SHELL)	19	POLE (ISPP)	133
LABEL (GPM)	161	POW (Mathematic Library)	53
LALGO (BPS)	187	POWER (ISPP)	134
LAYER (BPS)	189	PREV (GPM)	169
LEARN (BPS)	190	PRINT (SHELL)	22
LEND (BPS)	191	PRINTF (SHELL)	23
LENGTH (SHELL)	20	PROC (SHELL)	24
LEVIN (ISPP)	125	PUT (SYSTEM)	92
LINE (GPM)	162	PUTS (SL_UTIL)	65
LOG (Mathematic Library)	49	RANK (ISPP)	135
LOG10 (Mathematic Library)	51	READ (SHELL)	25
LOG2 (Mathematic Library)	50	REC (BPS)	195
LPBTW (ISPP)	126	REFORM (SYSTEM)	93
LTYPE (GPM)	163	RETURN (SHELL)	26
LWIDTH (GPM)	164	REVERSE (SYSTEM)	94
MABI (SYSTEM)	85	REVTIME (SL_UTIL)	66
MAP (GPM)	165	ROTATE (SYSTEM)	95
MAT2SAT (DCM)	261	RVMAP (BPS)	196
MATLAB2SATELLITE (DCM)	262	SAM (SYSTEM)	96
MAX (SYSTEM)	87	SCALAR (SHELL)	27
MAXPOS (SYSTEM)	88	SCALE (GPM)	170
MERGE (SYSTEM)	89	SERIES (SHELL)	28
MIN (SYSTEM)	90	SETREC (BPS)	197
MINPOS (SYSTEM)	91	SGN (Mathematic Library)	54
MNRAND (ISPP)	127	SHIFT (ISPP)	136
MOD (Mathematic Library)	52	SIGMOID (BPS)	198
MODULE (SHELL)	21	SIN (Mathematic Library)	55
MUL (ISPP)	128	SIZE (GPM)	172
NASSIGN (NCS)	207	SNAPSHOT (SHELL)	29
NCAL (NCS)	221	SPCF (ISPP)	137
NCHGBUFF (NCS)	223	SPLINE (ISPP)	138
NDELAY (NCS)	216	SPRINTF (SL_UTIL)	70
NE (NCS)	222	SQRT (Mathematic Library)	56
NERASE (NCS)	219	STRING (SHELL)	30
NEURON2SATELLITE (DCM)	264	STRLEN (SHELL)	31
NEWPAGE (GPM)	167	SYMBOLS (SHELL)	32
NGETP (NCS)	220	Scalar (SL_UTIL)	67

Series (SL_UTIL)	68
Snapshot (SL_UTIL)	69
Sprintf (SL_UTIL)	71
String (SL_UTIL)	72
TAN (Mathematic Library)	57
TEACH (BPS)	199
TEXT2BUFFER (DCM)	266
TEXT2STRING (SL_UTIL)	73
TITLE (GPM)	173
TOLOWER (SL_UTIL)	75
TOUPPER (SL_UTIL)	76
TRANS (ISPP)	139
TXT2BUF (DCM)	265
TYPEOF (SHELL)	33
UNDEF (SHELL)	34
UNITMAT (SL_UTIL)	74
UNIX (SHELL)	35
URAND (ISPP)	140
WAIT (SYSTEM)	97
WALGO (BPS)	200
WCLOSE (GPM)	174
WE (GPM)	175
WEIGHT (BPS)	201
WELCOME (SHELL)	36
WGTLOAD (BPS)	202
WGTSET (BPS)	204
WHILE (SHELL)	37
WINDOW (ISPP)	141
WINIT (BPS)	205
WOPEN (GPM)	176
WRITE_TYPE (SHELL)	38
ZERO (SYSTEM)	98